

「笠戸丸」マルチメディア用ソフトウェア試作資料(5)

—戦時輸送船—

宇佐美昇三

The Stormy Days of the *Kasato Maru*

Shozo USAMI

On December 8, 1940 war began between Japan and the Allies. As Japan geared up for war, many ships were required to transport men and materials over the vastness of the Pacific Ocean. The *Kasato Maru* had her part to play in this drama.

Though she was forty years old at the time, she was given the arduous job of transporting goods to the army in the Kurile Island chain north of Hokkaido, and to carry coal back from China. The area she steamed through was full of allied submarines ; she also had to risk being bombed by allied planes.

A later assignment, given to her in July 1945, was to transport salted salmon from stocks held in the Kamchatka Peninsula. There was a great need for this protein-rich food in the home islands due to war shortages. This was a very risky mission because the Kamchatka Peninsula was near American air bases in Alaska and the Aleutian Islands.

Four vessels were given this assignment but two were unable to proceed because of air raids ; the *Kasato Maru* and one other ship managed to reach Kamchatka and were loading as quickly as they could ; luckily they went undetected by U. S. bombers and scout planes and submarines. However, on August 8, 1945, Russia declared war on Japan. The men of the *Kasato Maru* were unaware of this new development because they were out of radio contact.

The next day, when all the salmon was loaded, Russian bombers attacked her and she was sunk.

It is ironic that she began her life as a Russian Imperial vessel and ended her life as a victim of Communist bombers. However, in each stage of her long and useful career—as a transport ship carrying Japanese immigrants to Brazil, as a luxury liner on the Formosa run, as a crab meat processing ship and as a wartime transport and cargo vessel, she served well and faithfully. All who sailed on her and benefited from her service recalled her fondly and with great respect.

凡例：○単発資料による笠戸丸の動き、◇特定の資料による笠戸丸の一連の動き、▼資料による関連情報、
▽面接、郵便、電話による取材情報、□背景情報。

昭和17年（1942年）

□ 3年有半にわたって、米・潜水艦、空母機ならびに陸上基地機によって遂行された日本商船隊に対する戦略的作戦は日本の工業力と戦力を弱体化させ、その崩壊に拍車をかけた。（現代史史料39・『太平洋戦争 米戦略爆撃調査団1946～1947』抄）1975年、みすず書房、p. 368

□ この年、戦争のため蟹漁業は休漁。

▽ 元「日本水産」関係者の話：長谷川正一氏「昭和17年度は蟹だけでなく、何でも獲った。トロール船でカレイをとって冷蔵した。左近司氏がやったと思う」

近藤源太郎氏「笠戸丸を他社が貨物船として傭船すると、固有船員は乗せたまま貸す。日本水産の漁業関係のスタッフは降りる」

原口安雄氏「笠戸丸を貸し出すときは船内の工船としての設備は撤去する。それはたちまちできる」。

4月1日：船舶運営会創立：日本郵船の大谷登社長が総裁に就任。軍および官庁の徴用船を除く100総トン以上の汽船などの一元的運営にあたった（日本郵船株式会社編・発行『日本郵船戦時船戦史・下巻』昭和46年、pp. 840—907、以下『郵船戦時』と略記）。

□ 4月10日：日本海軍は旧式駆逐艦を主力とする第1海上護衛隊（内地～シンガポール）と第2海上護衛隊（内地～トラック）を創設する。（大井篤『海上護衛戦』によるが『郵船戦時』には「3月27日：特設海上護衛隊創設」とある）。

□ 6月5日：ミッドウェー海戦で日本海軍は航空母艦4隻を喪失する。

昭和18年（1943年）

□ 1月26日：軍の指示のもとに運航する船舶の乗組員を選考のうえ軍属とする。船員の待遇向上による士気高揚を図る。

□ 2月7～9日：日本軍はガダルカナル島から撤退。

□ 3月31日：日本海洋漁業統制会社設立（日本水産の海上部門が主体）。

□ 5月29日：アッツ島の日本軍守備隊玉砕。

○ 8月22日14時：北海道茂津多岬沖で国籍不明の潜水艦に日本水産の遼海丸（4,682総トン）が撃沈される。遼海丸は壽都港から函館に航行中であった。（遼海丸は蟹工船として、笠戸丸としばしば行動を共にしている。沿岸住民の協力で全員救助される。笠戸丸は事業部員を小樽で上陸させ、陸路帰宅させた。

▼ 海防艦「石垣」（昭和16年2月竣工）カムチャッカ、アッツ方面の作戦に従事。10月8日「幸光丸」護衛のため柏原湾発。18時32分、阿頼度島魚見崎の29.5度18.6度の地点で敵の浮上している潜水艦を発見し、砲撃を加えた。初弾が潜水艦の司令塔前部下方に命中。25メートルの近距離に肉迫して砲撃を加え、全弾命中し撃沈した。この潜水艦は「USS44」といい、捕虜2名を得る。

○ 10月17日：笠戸丸はカムチャッカのオバラ発、片岡湾着：海防艦「石垣」が護衛。

▽ 10月19日：「石垣」は船団護衛のため片岡湾発。10月24日小樽入港。

荒天のため時間待ちしているとコンソリデーテッドB24爆撃機の銃撃を食う（鍵正一氏の話）。海防艦の機銃は寒さで氷結。握り飯を吊るし鍋に入れ、食べられる時に食べる。防寒外套のまま寝るがローリングがひどい。翌19年5月31日「石垣」は米潜ハーリングの雷撃で沈没。艦長以下167人全員戦死。5月末は流水多く、10分ともたなかったろう。（18年6月まで石垣乗組員瀧川正氏の手記『海防艦戦記』より）。

□ 11月：日本海軍に海上護衛総司令部が設置される。元海軍大臣及川古志郎大將が司令長官となる。

□ 商船を3つに区分し、陸軍が使用するA船、海軍が使用するB船、民間が使用するC船とする。

昭和19年（1944年）

大太平洋・アジア全域における日米英の戦いは激しく、1月インパール作戦認可、2月マーシャル諸島に米軍上陸、日本軍人軍属6,500人が全員戦死。6月、日本本土では空襲に備えて学童疎開が始まる。欧州ではソ連軍のレニングラード攻勢が始まり、6月には連合軍のノルマンジー上陸成功でドイツの形勢不利となる。

□海軍は商船を特設巡洋艦や特設潜水母艦などに改造して使用した。1900年完成の笠戸丸は船齢44年で民間船C船である。C船でも海軍の警戒隊員が乗った。

▽往きに海軍の物資を輸送し、帰りに民間の貨物を積むこともある。近堂源太郎氏らによると、笠戸丸は5名以上の海軍の警戒隊をのせ、船首に25ミリ連装機銃、船橋上に7.7ミリ機銃、船尾に8センチ砲と爆雷を搭載した。笠戸丸操舵手小阪谷寛斌氏から昭和57年11月に送られた笠戸丸の武装見取図あり。

陸軍の片岡巍氏や駒宮真一郎氏によるとA船には陸軍船舶砲兵（船舶隊と略称）が乗り、時には野砲や山砲を車輪つきのまま、ロープで後甲板に固定し、砲の回りには土嚢を積み、弾丸は油を引いて傍においた。これだと船尾方向しか撃てない。台に砲身を乗せたときは左右30度の射界があった。大砲が不足すると木製の大砲（擬砲）を積んだ。擬砲のため、敵潜水艦に見破られて「撃ってみろ」と揶揄されることもある。爆雷は梯子状の滑り台に筵を敷いた上に10発ほど置き、ロープで仮止めしていた。潜水艦がいれば、ロープを切って爆雷を落とす。そのとき筵に水をかけて濡らした。

▼森田友幸氏は『25歳の艦長海戦記』で僚艦「薄雲」「白雲」優秀船日蓮丸、高島丸が潜水艦にやられ、零度に近い海では数分で凍死してしまい、生き残った人はなく、厳しい北洋の悲劇をひしひしと感じたと書いている。

▼昭和19年2月米潜水艦スコピオン「USS278」が東支那海で沈没。東経167度30分、北緯30度07分。新興丸（のち2号新興丸）などが敷設した機雷によるらしい。ここまでアメリカの潜水艦が侵入していた。

□2月1日：船員の職名：運転士を航海士に改称。船舶通信士を新設。（時期に異説あり）

□3月：日本とソ連の漁業交渉が解決する。

◇3月1日：笠戸丸は大阪発、3月9日中国の塘沽着。（昭和20年1月28日までは防衛庁資料『④船舶104：大東亜戦争徴用船舶行動概見表：甲第5回の1、カ～コの部』による）。

▼3月6日午前5時9分：大阪商船亜米利加丸はサイパン島から引揚げの邦人を乗せて航行中、硫黄島南南東において左舷中央部と4番船倉に被雷、沈没した。便乗者3人、警戒隊員6人、船員34人、計43人が救助されたが、大部分の便乗者511人、警戒隊員4人、船員84人、計599人が死亡した。スワン・アンド・ハンター造船所が亜米利加丸を建造した。この造船所は笠戸丸を建造したウイガム・リチャードソン造船所と後に合併する。亜米利加丸は、最初、東洋汽船に属し、日露戦争中は仮装巡洋艦としてカムラン湾を偵察、大阪商船に移籍した後は、台湾航路で笠戸丸と並んで就航した。笠戸丸と縁の深い船である。亜米利加丸を撃沈したアメリカの「ノーチラス」は、戦前、世界でも有数の大型潜水艦であった。

◇3月14日：笠戸丸は塘沽発、瀬戸内海の因ノ島に向かう。3月30日着、翌日から4月13日まで笠戸丸は因ノ島で入渠修理。

◇4月14日：笠戸丸は因ノ島発、27日大連着。5月1日発、7日函館着。

◇5月23日：笠戸丸は函館発、29日千島柏原着、6月6日発、15日小樽着。6月21日：笠戸丸は小樽発、千島方面に向かう。7月7日（注1）と9日（注2）敵潜水艦と交戦。

□6月16日：中国の基地からアメリカのボーイングB29重爆撃機が北九州を初空襲。

□6月30日：三菱長崎造船所は特攻兵器「震洋」の建造を開始。これはモーターボートに爆薬を積み、敵の艦船に体当たりする特攻兵器である。

○7月5日：笠戸丸は「キ504船団」の大平丸、梅川丸、2号新興丸に加わり小樽を出港。特型の一等駆逐艦「薄雲」ほか2隻が護衛し、千島方面に向かう。

□7月7日：サイパン島の日本軍守備隊玉砕。民間人も多数死亡。

○7月7日14時：笠戸丸を護衛中の一等駆逐艦「薄雲」(1,680トン)が潜水艦の魚雷を受けて沈没。森田友幸氏の私信によれば、7月5日に第7駆逐隊は司令古閑大佐指揮のもとに小樽を出港。一等駆逐艦「曙」「薄雲」「潮」の3隻で「キ504船団」を護衛し北方に向かった。7日「薄雲」が潜水艦の魚雷を受け、高く黒煙を上げて2分間で沈没。1番弾火薬庫に命中したと思われる。「曙」は敵潜水艦を制圧攻撃、「潮」は人命の救助に当たったが生存者は少尉候補生1名、下士官兵百名であった。若杉次一(海軍少佐)艦長は戦死。当時の日本駆逐艦には対潜探信儀(ソナー)が装備されていなかった。聴音機のための装備で敵潜水艦の発見には無に等しかった、とある。

▽日本側は「薄雲」の沈没位置を択捉島の北緯47度36分、東経148度10分。米国海軍記録は「スケイト(USS 305)」が北緯47度43分、東経147度55分で撃沈したと記録。笠戸丸の操舵手見習・栗原達雄氏によると笠戸丸を狙った魚雷が「薄雲」に命中し、同艦は轟沈した。

□「薄雲」は特型の1等駆逐艦：昭和3年7月26日完成である。この艦の履歴は損傷や故障した時期があって、比較的地味であるが、キスカ島の撤退作戦に従事している。

▽元陸軍大尉の平松清一氏の著書『奇跡の高射砲隊』に氏が守備していたキスカ島を撤退したとき、平松氏が「薄雲」に収容されたとある。筆者はそのときの状況を平松氏から取材したあと「薄雲」の沈没状況を平松氏に伝えたところ平松氏からは「書斎の地球儀の上で薄雲の沈没地点を押さえて、しばし黙禱しました。きびきびした若い海軍士官の応対ぶりが思い出される」と返信があった。平松氏によればアッツやキスカに向かったときの輸送船球磨丸(7,510総トン)は船倉の半分に大量の玉葱を積んだ。のちに玉砕した山崎部隊はこれを野菜として奮戦したらしい。

▼笠戸丸と行動した「2号新興丸」(2,577総トン東亜海運)は特設砲艦の経歴があり、改名や機雷敷設、終戦後に北海道でソ連潜水艦に攻撃されるなど波瀾に富んだ船歴を持つ。

▽元海軍大尉森田友幸氏の著書『25歳の艦長海戦記：駆逐艦天津風かく戦えり』(光人社、2000年)に森田氏が駆逐艦「霞」に乗艦していたころ僚艦「薄雲」が沈没したとあった。筆者は森田氏から当時の各艦の航行状況を図入りで説明した葉書を頂戴した。

○7月9日9時50分：笠戸丸所属「キ504船団」の大平丸(6,284トン：大洋海運A船)は米国潜水艦「サンフィッシュ(USS281)」の魚雷攻撃で沈没。日本側は北緯51度23分、東経155度48分(一説には北緯51度19分東経155度43分)米国側は北緯51度10分、東経155度34分と記録。大平丸の記録によると7月5日14時小樽出港、幌筈島柏原向け航行中、右舷から雷撃をうけ回避したが、1分後またも雷撃を受け右舷船橋下に命中、3発目は一番倉に命中、浸水のため船体がたちまち右に25度傾斜し沈没の様相を呈したため、10時05分総員退船が下令された。10時45分船尾を垂直に立てて全没。乗船の第91師団は兵員ほか1,812名中902名、船員45名が戦死。(駒宮真七郎『戦時船舶史』私家版、平成3年、p.143)

○防衛庁資料④船舶121『遭難船舶乗船部隊上申調』によると902名は次の通りである。

部隊号		1890 PTL 1P	5CA 特情	T/91 D	海運設 営労務 隊	北部 軍経 理部	1TK	55 ab	91D 防空	11D	東京 1造 兵廠	6 揚陸隊	計
部隊名	體 13826 部隊												
隸属	9BS	船司	5CA	91D	船司	北部 軍			91D	11 D		船司	
海没	1 {名}	2	3	8 7	134	666	1	3	2	1	1	1	902 {名}

▽笠戸丸の操舵手小阪谷寛斌氏(福井)と無線次席永沼勝治(仙台)が目撃した直話。「大平丸は船首から斜

めに沈没したが、スクリューが回りつづけていて、海に飛び込んだ兵士を巻き込んでいた。約2,000人は乗っていたろう。笠戸丸から皆が『大平丸よ、エンジンを止めろ!』と叫んだ。あのような悲惨な光景は忘れようにもわすれられない…」

笠戸丸の無線次席、永沼氏からの書簡：昭和59年9月15日付けによると笠戸丸の無線設備は「日本無線の500W真空管方式410 KHzで、無線室は4×8メートルぐらいで中甲板にあり、そばがサロンだった」とのことである。

◇7月9日：笠戸丸は片岡着、同日片岡発。カムチャッカに向う。

▼7月16日：病院船時代に笠戸丸の無線局長だった奥田正三氏は「志あとの丸」でバシー海峡を航行中、米潜水艦に撃沈され、逝去。

◇7月17日：笠戸丸はヤイナ着。18日発、7月18日：ゴゼコチック着、21日発、24日オゼルナヤ着、26日発、ケフタ第1工場着。31日発、8月1日南オロスコイ着、同日発、3日ケフタ第2工場着、4日発、5日片岡着、同日発。8月10日小樽着、9月2日発、12日南オロスコイ着、14日発、18日ケフタ着。23日発、28日柏原着、30日発、10月13日函館着。

▽小阪谷寛斌氏によるとカムチャッカの帰途、米軍のグラマン2機の機銃掃射をうけ、2番船倉にいた作業員が1名頸部貫通銃創で死亡、1名は腹部に被弾して重傷を負う。

□海軍省のコンクリート製貨物船「第1武智丸」800グロストンが武智造船所で竣工。

◇10月27日：笠戸丸は函館発、27日室蘭着、29日発、31日伏木着。10月5日発。11月8日因ノ島着、26日発。27日若松着、29日発、12月1日元山着、7日発、11日新潟着、18日発、19日小樽着、25日発、28日伏木着、31日発。

□10月25日：日本海軍の神風特別攻撃隊がレイテ沖でアメリカ艦船を初攻撃。

□11月24日80機のB29が東京を初空襲。

□武田泰淳の小説『ひかりごけ』では12月3日に暁部隊の第5清神丸が根室発、知床経由で小樽に向かう。遭難者による人肉食事件を扱う。

昭和20年（1945年）

◇1月3日笠戸丸は小樽着、12日小樽発、14日伏木着、18日発、20日小樽着、23日発、28日舞鶴着（防衛庁資料『④船舶104』による記録終わり）

□4月7日：戦艦「大和」沖縄特攻作戦中、空襲のため爆沈。北緯30度43分東経128度4分。総員3,332名中生存269名吉田満氏は「水深430メートル、今なお埋没する三千の骸」と『戦艦大和の最後』に書く。

「大和」は「タイタニック」や「洞爺丸」の事故をはるかに上回る数の戦死者を出した。

□4月30日ドイツのヒットラー総統自殺、5月2日ドイツ降服。

◎5月19日：笠戸丸は朝鮮鞍馬島沖北北東7浬で敵潜水艦と交戦。以下『④戦闘詳報日誌（913）大東亜戦争戦闘詳報：武装商船警戒隊19年5月～20年7月』綴り「船警機密31号の812号：昭和20年6月13日戦闘詳報」の要点。商船笠戸丸警戒隊長海軍上等兵曹真鍋延夫：①船の性質：貨物船、②昭和20年5月19日22時15分北緯35度25分東経126度08分。朝鮮鞍馬島沖北北西7浬。③形勢：敵情不明、本船航海中、速力9浬、天候霧、視界良好、④計画：関東州西中島より粉洗塩（ママ）5,200トン搭載函館に回航せんとす。⑤経過：5月16日西中島発の途中、上記地点で右45度約9千メートルに敵の浮上した潜水艦を発見。直ちに25ミリ機銃および長8センチ砲をもって攻撃撃退せり。⑥成果：射撃効果不明なるも後襲撃を受けることなく、鞍馬島に仮泊せり。⑦功績：発見者木村嘉吉。1.合戦図、2.死傷なし、3.船体兵器の損傷なし、4.兵器消耗調べ：40口径安式8センチ砲弾2発、25ミリ機銃40発。警戒隊員：真鍋延夫上曹以下17名：船長中本秋夫。

▽小阪谷寛斌氏の書簡：

見張り「右舷潜水艦らしきもの反航」海軍兵が直ちに発砲。反航ゆえすぐ見失う。味方駆逐艦右舷遠くより「タレタレ（=誰）」と発光信号あり。

笠戸丸「われ日本船笠戸丸」

駆逐艦「発砲せしは貴船なりや」

笠戸丸「然り」

駆逐艦「なにゆえに発砲せしや」

笠戸丸「浮上潜水艦らしきもの発見、発砲せり」

駆逐艦「われに近寄れ」

この時、笠戸丸は駆逐艦に接近し、駆逐艦と初めて認識する。

駆逐艦「貴船は何処より何処にいくか」

笠戸丸「大連より函館に向かう」

駆逐艦「われこれより貴船を護衛する」

笠戸丸「よろしくおねがいします」

この後、駆逐艦に守られて安心して航海を続け、夜は島影に投錨して釜山の近くまで送ってもらう。駆逐艦の艦名は秘密で分からなかった。

▼このアメリカ潜水艦は「ビルファイシュ」かもしれないが不明。前述の森田友幸氏は「夕闇でも浮上潜水艦を発見する可能性はある」と肯定的。

▼6月23日：第二百五号海防艦：小樽発「笠戸丸」を護衛し津軽海峡にむかう。途中神威崎で海防艦「笠戸」（商船の笠戸丸と似た名前だがこちらは護衛を主任務とする海軍の小型艦）が前日敵潜水艦の雷撃で艦首を大破しているのをみる。以後、第二百五号海防艦は船団護衛をやめ、敵潜制圧に従事。6月25日函館に入港する。

▼6月23日沖縄の日本軍守備隊全滅：明治41年に笠戸丸でブラジルに移住し、父母見舞いのため、一時沖縄に帰郷していた比嘉光永氏は戦死。

▼7月2日ごろ「第五十七号海防艦」は小樽に帰投。

▼7月7日：「第七十五号海防艦」（上記の「五十七号」とは別の海防艦）は小樽着、日魯漁業「信濃丸」船団のカムチャッカ方面護衛作戦に参加。

○7月15日：笠戸丸は小樽に入港する。信濃丸他の数隻の貨物船とともにカムチャッカにゆき、前年に積み残した塩蔵鮭など漁獲製品を内地へ持ちかえるように命じられる。国内では蛋白質食料が不足していた。当時ソ連はまだ中立国で、査証は簡単ではないが得られた。笠戸丸は武装を解除し、護衛には2隻の海防艦があたる。この海防艦の艦種や艦名が資料に間違って記されていて筆者は回り道をさせられた。

□7月14～15日に函館、小樽、室蘭はアメリカ第五十八機動部隊の空襲を受ける。

▼7月15日：海防艦「笠戸」は小樽警泊中、敵機と交戦。

▼第五十五号海防艦は対空戦闘、撃墜12機、撃破2機の戦果を挙げる。戦死9名、艦体損傷（第五十七号の記録によれば第五十五号は港外にでたため被弾。ほかに500トン級商船1隻を失う）。

○7月27日：笠戸丸は小樽出港：第2龍寶丸とともに第七十五号海防艦と第五十七号海防艦に護衛され、カムチャッカに向かう。信濃丸、山城丸は「空襲のため損傷」との理由で参加せず。7月25日小樽を笠戸丸、第2龍寶丸が出港。第七十五海防艦、第五十七海防艦が護衛する。第五十七号海防艦の記録に「第三十六号海防艦（ママ）とカムチャッカに向かった」とあるが、三十六号でなく第七十五号海防艦（飯村忠彦艦長）である。第三十六号海防艦は20年8月14日船川より小樽へ単艦行動中でカムチャッカには行っていない（檜尾忠一氏＝元三十六号艦長に確認）。空襲の日時、防戦対策、出港日、被害状況は「皆無」から「若干あり」まで各艦のそれぞれの記録が食い違う。

▽笠戸丸首席3等航海士、工谷庄一氏の記録「笠戸丸はもともと日本水産の所有。当時は船舶運営会所属。船員は日本水産所属。日魯漁業が傭船した。船員75名と情報将校大尉と少尉が各1名船員として便乗。計77人。荷役作業員75人、日魯漁業社員2名、船医1名、通訳1名、総計156人が乗船。空襲を25日（ママ）に受け、港内の駆逐艦（ママ）が反撃、戦闘は約30分続く。信濃丸は修理不能となり（ママ）出港中止。笠戸

丸と第2龍寶丸が風型駆逐艦（ママ）2隻の護衛にあたり、速力8ノットで警戒体制航海を続け8月2日午前7時予定地点のカムチャッカ西海岸キシカ沖に到着。海岸から3浬沖、水深18メートルの地点に投錨。1日午前8時半ソ連官憲の査証を確認し、無線室を封鎖（真空管を持去る）。舢舨を使って荷役を開始。塩蔵新巻2,100箱、缶詰、筋子などを笠戸丸に積み込む。」

□8月6日広島に原子爆弾投下、笠戸丸で明治41年ブラジルに移民した大工・西村房吉氏は日本の親元へ一時帰郷中、被爆死亡。夫人ワイは戦後ブラジルへ再渡航する。9日には長崎に原爆投下。

▽8月8日：ソ連は日ソ不可侵条約を破棄して対日宣戦布告。笠戸丸や第2龍寶丸の人々は無線封鎖中で知らなかった。情報将校として、中野学校出身のA大尉とともに笠戸丸に乗船した森下康平陸軍少尉によれば笠戸丸は7月15日（25日と記したもの）空襲、27日出港、途中、函館に寄り、襟裳岬をかわす。中千島沖でシケに遭遇、僚船を見失うほどだったが、北千島をかわすころナギ。7月31日夜半に目的地ウトカ沖合到着。水深11メートルまで一旦進入後、後退して16メートル地点で投錨、6日は嵐で休養日となる。この間、森下氏は、ライカ2台コンタックス1台を使用して写真撮影を行ない、方眼紙見取り図の兵要地誌を完成。▽工谷庄一氏「8月9日に荷積み完了、陸上の後始末をして航海準備にかかるころ、午前9時5分、ソ連兵が自動小銃をもって来船。全員をサロンに集合させる。『点呼を陸上でするので、左舷の舢舨に移乗せよ』という。さらに笠戸丸の無線機をハンマーで破壊。第2船倉にいる病気の作業員1名を残して、舢舨に全員乗船開始9時40分、乗船終了10時20分、55分掛って陸上に曳航、11時15分に全員上陸。」

▽森下陸軍少尉「9日午前9時、ソ連警備艇が笠戸丸に乗りつけ、大尉を長とする海岸警備隊1個分隊が乗船、小銃は着剣、自動小銃は遊底を下げた非常体制で、素早く要所配置につくとともに全員を集合させた。森下少尉は資料をゴム袋に入れて海中に沈め、後に繋ぎ綱を切断投棄する。舢舨2隻で上陸、高級船員と下級船員および作業員は別々の群に分けられ赤軍兵士を交えた混成部隊に監視される。ウ二型戦闘機4機が飛来、全員頭を抱えて伏せるように指示される。やがて甲高い爆発音がして、立ちあがると降下姿勢のエム・ベ・エル水上機2機が笠戸丸に跳躍爆撃をしていた。中央エンジンルームと後部船倉付近に命中弾があり、2条の煙が上がる。やがて笠戸丸は静かに座るように沈下、中央船室まで海没して動かなくなる。船員、作業員は着のみ着のまま、20キロを徒歩で連行され、野宿に近い収容所に泊まり、8月15日に日本の敗戦を知らされる。26日、本格的な収容所に入れられた。」

▼飯野海運「第2龍寶丸」船長荒川三郎の報告「水産加工物積込みのため31日ケフタ沖到着。翌8月1日08：00ソ連官憲の来船。手続き完了。鱒缶詰5万個、塩鮭、筋子、漁業資材を満載9日出港の寸前13：00ソ連兵士数十人が来船『米潜がオホーツクに進入、北上中、日本政府の依頼で保護するので下船せよ』という。日魯漁業幹部と協議のうえ『作業員は下船、船員は下船しない』という、ソ連は『モスクワの命令で武力により下船させる』という。全員22：00上陸。奥地に連行される。」

▽木村五郎（元第七十五号海防艦砲術長）「8月9日夜 第七十五号海防艦は笠戸丸の投錨位置に接近し、搜索するも見当たらず、波の音に敵魚雷艇の接近を予想して、主砲、機銃を指向、探海燈を照射したところ、汽船の上部構造物と積荷を発見する」。第五十七号海防艦もまた沈没船のマストだけで人影を認めなかった。陸戦隊を編成したが兵器が不足なため帰途につく。両艦は帰途占守島の守備隊を収容する。

▼8月12日：第2龍寶丸の乗組員は「ソ連の参戦」を知らされ、監禁、使役、2年4カ月後の昭和22年12月8日乗組員48人無事函館に帰還：（この時点では笠戸丸の消息は不明）。

▼8月15日：日本は連合国に降服。

▽8月17日：第五十七号海防艦は小樽に入港。体当たり作戦を準備するが中止。戦後、復員船業務に従事。さらに宇部港で防波堤となる。筆者は昭和56年11月に宇部の赤灯台を訪ね、たまたま第五十七号海防艦の後身の防波堤が、今度は撤去されつつある作業現場をみる。

8月20日：第七十五号海防艦は帰途占守島で収容した守備隊を小樽で揚陸。

8月23日：第七十五号海防艦は新潟県糸魚川沖、能生灯台の3.5浬沖で自沈。

11月20日：日魯漁業テジマ工場の作業員が海岸で笠戸丸の甲板の一部と見られる木片を拾得。工場医師中村

善博氏に届ける。氏は木片を大切に荷物に秘めて22年11月帰国。24年11月に笠戸丸元船長中本秋人氏に手渡した。筆者が明治村東京事務所で土屋博靖所長からみせられた木片は長さ38センチ、幅3センチの柾目の板で端はぎざぎざ、中央に赤い塗料が飛び散ったあとがある。これを小坂谷寛斌操舵手に伝えと氏は「左舷燈（赤色）の囲いを赤く塗装したとき、上甲板にたらししたペンキのあとではないか」という。拾得した中村氏の中本船長氏あて添え書は、「ああ、顧みれば昭和24年8月9日よ。すでに満四星霜は経過せり。お互いに帰還後亦満2年を過ぎたり。感無慮なり矣。奇しくも抑留4ヶ月目24年11月20日（ママ）労務員より本品拾得持参あり。笠戸丸の或いは変事ありしにはあらずやと感知せり。果たせるかな撃沈せられたる記念の一部品なり。（後略）」とあった。木片に「20年11月20日南オロスコイ海岸にて拾得：木片に左舷笠戸丸也」とある。これは中本船長の筆跡かもしれない。だれにせよ左舷という認定は、小坂谷氏と一致する。この木片は中本船長の没後、文子夫人から『サントス第十四番埠頭』や『航跡：ロシア船笠戸丸』の著者・藤崎康夫氏を通じて57年11月に博物館明治村に寄贈された。

12月1日：日本海洋漁業統制会社は水産統制令廃止により「日本水産」に戻る。

昭和22年10月23日工谷庄一氏ら136名帰国（船員7名、作業員8名死亡、日魯社員および情報将校2名、通訳1名はソ連へ連行される）。森下康平陸軍少尉らはスパイ容疑でソ連の軍事裁判に掛けられる。

昭和28年7月7日付け『岐阜タイムス』要旨「終戦直前消息を絶った森下陸軍少尉が昭和26年5月（ママ）まで生きていたことが明らかになった。これは25年ソ連に拿捕され、このほど釈放された漁船員がもたらしたものだ。カムチャッカのペテロパヴロスク第1獄窓の折りたたみ寝台の板に刃物（釘）で次の言葉が刻まれていた。『草莽の臣陸軍少尉森下康平こと当地偵牒の任を帯び到りたるも、敗戦の混乱に伴い事内より露見する処となり捕らわれて本牢に座す。身が加州の土とならんは悔いなきも伝え聞く皇国の運命は悲憤やるかたなし。七生報国を誓い皇国の再建を祈念す。昭和21年3月28日入る。5月28日出ず。』

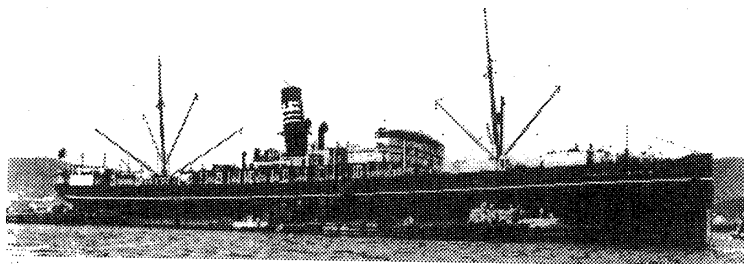
〈北海の荒磯浪に砕け散る自が生命は省みざるも〉

郷土を懐うは邪念なれども身は岐阜県高山市城山が出身にして父母あり。人あらば伝えられむことを』森下少尉のその後の消息は不明である。」

▽筆者は、この漁船員から直接事情を聴取した元海上保安官岡本恒昭氏と20年前偶然同僚だった。筆者が笠戸丸を調べていると漏らしたとき、岡本氏はこの遺書をすらすらと暗唱した。漁船員は小学校をでるやすぐ船に乗った人たちだったが、その人たちも、この遺書は日本へ伝えようと懸命に暗記して帰国した。一方、森下少尉は昭和28年12月1日に興安丸で舞鶴に帰還した。上記の遺書部分がもとの新聞記事と若干ことなるのは、筆者が森下康平氏から直接取材したためである。

▼ブラジルでは日本の敗戦を信じない「勝ち組」と敗戦を認識する「負け組」が発生し、日系人間で殺人、暴行、放火やこれに便乗した詐欺事件が発生する。死者17人、重傷12人。

戦前、日本の商船は646万総トンで世界第3位であったが、終戦時は166万トンとなり、戦時中に普通海難40総万トンを含めて2,568隻890万総トンを喪失した。戦時下の船員29万6千人内6万2千人が戦没、船舶運営会の汽船関係船員では生存70,900人、死亡30,592人で死亡率は30.14%となる。陸海軍人の死亡率は21.8%であった。兵站補給の軽視は戦時だけではない。今日の日本でも各方面で場当たりの施策が見うけられる。笠戸丸調査では多くの人々と出会い、海事史、移民史、漁業史、戦史を読み、イギリス、ロシア、中国、台湾、ブラジル、インドを尋ねた。1908年ブラジル移住が始まり、やがて百年。笠戸丸には、依然、謎があり、誤伝もある。本ソフトで少しでも真実を明かすことができれば幸いである。



【付録1】マルチメディアソフトウェアとしてのリンク先の一例：

1. 移住者名簿の考察

1908年（明治41年）に日本最初の「契約による家族集団移住」が移民船、笠戸丸によって行なわれて、やがて百年目を迎える。筆者はこのほど、その移住者名簿について資料考察を行なった。このほど、纏めた「第2回・移民船時代」のリンク先「移住者名簿の考察」を提示する。

2. この研究の目的と方法

目的：笠戸丸による第1回日本人ブラジル移住者の氏名を明らかにする。

方法：名簿を比較照合してすこしでも正確な資料を得る。内容分析の手法を応用する。

3. この研究の背景

日本最初のブラジル移住事業には、しっかりした史料がない。ブラジルは一国で最大の日系人人口を有する。そして、笠戸丸移民は日本の歴史上、最初の「本格的な家族による集団移住」である。しかし、ブラジルへの日本人移住史の第1ページにはわからないことが、いくつかある。例えば配耕地先の移住者の人数でさえ、資料によって相違する。

第1回のブラジルへの移住事業は失敗だった。日露戦争直後の復員兵士や農村の不況対策として急に計画され、十分な情報や準備なしに進められたこと、ブラジルのコーヒーが不作で収穫期を過ぎてから日本からの移住者が到着したことなどが重なったためである。

移住者に農業経験者の割合が少なかったこと、家族移住という辻褃を合わせるため、移民会社が急遽、血縁家族以外の縁者や、知人を家族構成員にした「構成家族」を仕立てたこと、家族内に渡航不能者が発生した家族が、多額のキャンセル料を払えないため「身代わり渡航者」を仕立てたことなど最初の移住計画の理念に反する要素もあった。

当時の旅券は写真がなかったので、年恰好が同じなら、本人に成りすますことができた。こうした「非農家、疑似家族」が、コーヒー農園という奴隷使役の流れを持つ労働環境の中で、文化摩擦を経験し、「家族」内の人間関係のきしみを発生させたことも、移住事業不成功の一因である。

2000年10月現在、三つの移住記念事業が進行中である。

まず、国際協力事業団の海外移住センターでは、横浜の「みなとみらい」に平成14年開館を目指し、国際センターの建設を準備している。ここでは移住関係の史料展示室と研究者用の閲覧室が設置される計画である。次に、移民船の出発港だった神戸では、かつての国営移住者用宿泊施設「移民収容所」の建物を史料館とし、ここから波止場に至る道路の整備と、波止場の一角に移民家族を顕彰する移民船乗船記念碑（平成13年4月に除幕予定）を計画している。また、ブラジルのサンパウロにある日本移民史料館は、既に内部の模様替えが完成し、移住関係展示や、史料が再整備された。

4. 資料の種類と限界

第1回日本人ブラジル移住者の名簿は、いくつか種類がある。以下、これらを筆者が閲覧した順に記す。

第1名簿はサンパウロの日本総領事館にあるとされる「笠戸丸便：第1回伯刺西爾（＝ブラジル）行移民名簿」である。これは活字印刷の表紙である。移民50周年記念委員会発行の『かさと丸』（注1）が活字印刷している。移住者は、出身県別に生年月日、家族関係、本籍地が記されている。

第2名簿は同上書の『かさと丸』に収録された「配耕地別移民氏名」で契約移住者が到着後、六つのコーヒー農園のどこに配置されたかが活字印刷されている。移住者の出身県と郡名のほか家長、妻、調査時期ごとの生存者が示されている。この名簿は第1名簿と同じ書物に収録されているので、整合性があるはずだが、氏名表記が第1名簿と異なる人物がある（注2）。

第3名簿は、『移民四十年史』に収録された「第1回移民の耕地配耕表」である。これは2回の調査による生存確認や帰国、アルゼンチンへの転居、結婚による改姓が活字印刷されている。しかし、第2名簿と一致すべき耕地先の人数、従って人名に食い違いがある（注3）。

第4名簿は、国際協力事業団、琉球大学、横浜市立図書館などに保管されているマイクロフィルムの名簿で

ある。この原本は、サンパウロの移民史料館にある。表紙は手書きで『竹村第1回移民原簿』とある。これは、個人や1家族ごとにポルトガル語で欄名が書かれたカードに、ペン書きされており、撮影順番は、ほぼ姓のABC順である。カードはブラジルで移民会社の複数の書記が移住者に面接しつつ、記入したらしく、文字の崩し方や記入事項の詳細度は不統一である。また、笠戸丸移民として通説にない人のカードが混入している(注4)。

第5名簿は、移民の到着直後、ブラジルの日本領事館から東京の外務省に郵送されてきた移住者名簿である。1人の手による毛筆の楷書で、記入時期が明瞭で資料性が高いが、書き誤りと見られる姓名もある。現在、外務省外交史料館に原本が保存されている(注5)。

第6名簿は皇国殖民会社が明治41年5月、笠戸丸が、まだブラジルに向かって航行中に外務省に提出したものである(注6)。「伯国移民渡航者御届8425明治41年4月中弊社取扱による海外渡航移民名簿：別表通りに有之候此段御届申上候也。皇国殖民合資会社業務執行社員松井淳平、明治41年5月11日、外務大臣林薫殿。」と記されている。笠戸丸移民の名簿整理は船の出港後も船内で続いたと書記だった香山六郎の回想録にある。

第7名簿は移民25周年にブラジルで編集された「記念鑑」掲載のものである。香山六郎編集とあり、内容は配耕地別で第3名簿はこれを修正採録したものと見られる(注7)。

第8名簿は沖縄県出身者のみのものである。このほどブラジルで詳細な調査が行なわれた(注8)。おかげで最も人数の多い沖縄出身者の名前の考察が進んだが「同姓・同名、偽名、沖縄県人独特の姓名を誤記した公文書もあって調査が難航した」と同書66ページにある。

5. ミスプリについて

本人が戸籍名と異なる表記を常用している場合もある。活字印刷では、原稿入稿者が正しい字を書いても、該当活字の有無、植字や校正担当者により、ミスが発生する。それでもブラジルには、戦後も旧漢字印刷が残っていて、資料照合が容易だったのが有難かった。

各移住者の戸籍原簿を当たれば、確実な氏名表記、生年月日、続柄が判明するが、現在、戸籍縦覧は町村合併や災害による紛失、古い資料が倉庫入りしていたり、個人情報保護などのため、縦覧は困難である。従って上記8種類の資料の比較で一応、資料を整理し、個別の問題については、今後の研究課題とする。

▼は略字とはいえないものであるがやむをえず代用した。

浅→浅(あさ)	當→当(とう・あたり)	榮→栄(さかえ・えい)	帛→トラ(虎・寅)▼	龜→亀(かめ)
國→国(くに)	廣→広(ひろし)	澤→沢(さわ)	覺→覚(かく)	彌→弥(や)
藏→蔵(くら・ぞう)	嶺→峰(みね)▼	濱→浜(はま)	豐→豊(とよ)	與→与(よ)
實→実(じつ)	エ→エ	爲→為(ため)	靜→静(しずか・せい)	鐵→鉄(てつ)
篇→島(しま)	圖→図(ず)	畛→ヶサ(袈裟)	鹽→塩(しお)	萬→万
寶→宝(ほう)	岨→(と)砥▼	眞→真(しん・ま)	齊→齊(さい)▼	

6. 笠戸丸による第1回ブラジル移住者名簿

	① かさど丸名簿	② かさど丸 耕地名簿	③ 移民四十年史 配耕地名簿	④ マイクロ 名簿カード	⑤ 『外交史料』 毛筆記録	⑥ 皇国殖民 届け出	⑦ 25周年 記念鑑	⑧ 沖縄県 出身者名簿
6 福島	伊藤茂左エ門★	伊藤 茂左衛門☆	伊藤茂左エ門	伊藤茂左エ門	伊藤茂左エ門◆	伊藤茂左エ門	伊藤茂左エ門	
7 福島	野内寅治☆	野内 寅治	野内寅治	野内寅治	野内寅治	野々内寅治★	野内寅治	
9 福島	A 安齋彌惣右衛門☆	安齋 彌惣右衛門	安齋彌惣右エ門★	安齋彌惣右エ門	安齋彌惣右衛門	安齋彌惣右衛門	安齋彌惣右エ門	
11 福島	今井文之丞★	今井文之丞	今井久之丞☆	今井久之丞	今井久之丞	今井久之丞	今井久之丞	
15 福島	楠作右衛門☆	楠 作右衛門	楠作右エ門★	楠作右エ門	楠作右エ門	楠作右エ門	楠作右エ門	
17 福島	・渡邊トク☆	渡邊トク	渡邊トク	渡邊トク	渡邊トク	渡邊トリ★	渡邊トリ	
26 福島	K 神俣爲藏☆	神俣爲藏	神俣爲藏★	神俣爲藏	神俣爲藏	神俣爲藏	神俣爲藏	
27 福島	・神俣トメ☆	神俣トメ	神俣トメ★	神俣トメ	神俣トメ	神俣トメ	神俣トメ	
28 福島	神俣源五郎☆	神俣源五郎	神俣源五郎★	神俣源五郎	神俣源五郎	神俣源五郎	神俣源五郎	
31 福島	鍋谷伊三郎	鍋谷伊三郎	鍋谷伊三郎	鍋谷伊三郎○	鍋谷伊三郎	鍋谷伊三郎	鍋谷伊三郎	
35 福島	國分佐市☆	國分佐市	國分佐市	國分佐市★	國分佐市	國分佐市	國分佐市	
38 福島	S 菅野倉吉★	菅野倉吉	菅野倉吉☆	菅野倉吉	菅野倉吉	菅野倉吉	菅野倉吉	
39 福島	・菅野ヤス★	菅野ヤス	菅野ヤス☆	菅野ヤス	菅野ヤス	菅野ヤス	菅野ヤス	
40 福島	菅野喜八★	菅野喜八	菅野喜八◆	菅野喜八☆	菅野喜八	菅野喜八	菅野喜八	
45 福島	・三浦チエ☆	三浦チエ	三浦チエ	三浦チエ	三浦チエ★	三浦チエ	三浦チエ	

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
	かさと丸名簿	かさと丸 耕地名簿	移民四十名史 配耕地名簿	マイクロ 名簿カード	『外交史料』 毛筆記録	皇国殖民 届け出	25周年 記念鑑	沖縄県 出身者名簿
46 福島	本多丈右衛門☆	本多丈右衛門	本田丈右エ門★	本田丈右エ門	本多丈右衛門	本多丈右エ門◆	本多丈右エ門	
47 福島	・本多キク☆	本多キク	本田キク★	本田キク	本多キク	本多キク	本多キク	
48 福島	・本多クミ☆	本多クミ	(欠落)	本田クミ★	本多クミ	本多クミ◆	(欠落)	
49 福島	本多留蔵☆	本多留蔵	本田留蔵★	本田留蔵	本多留蔵	本田留蔵	本田留蔵	
52 福島	橋本善男★	橋本善男☆	橋本美男◆	橋本善男	橋本善男	橋本善男	橋本美男	
60 福島	高橋正次☆	高橋正次	高橋正治★	高橋正次	高橋正次	高橋正次	高橋正治	
63 福島	佐藤善明☆	佐藤善明	佐藤全明★	佐藤善明	佐藤善明	佐藤善明	佐藤善明	
76 福島	只野利助●	只野利助●(江助)	只野江助☆	只野江助	只野江助	只野江助	只野江助	
77 福島	・只野ウメノ●	只野ウメノ●(山本キイ)	山本キイ☆	山本キイ	只野ウメノ	只野ウメノ	山本キイ	
83 熊本	・藤本エヲ☆	藤本エヲ	藤本エヲ★	藤本エヲ	藤本エヲ	藤本エヲ◆	藤本エヲ	
88 熊本	宮部彌平☆	宮部彌平	宮部彌平	宮部彌平★	宮部彌平	宮部彌平	宮部彌平	
89 熊本	・宮部トハ☆	宮部トハ	宮部トハ★	宮部トハ	宮部トハ	宮部トハ	宮部トハ	
90 熊本	・宮部シズエ☆	宮部シズエ	宮部シズエ	宮部シズエ	宮部シズエ★	宮部シズエ◆	宮部シズエ	
97 熊本	・島村タジユ☆	島村タジユ	島村タジユ	島村タジユ	島村タジユ	島村タジエ★	島村タジユ	
100 熊本	森川卯八郎☆	森川 卯八郎	森川卯八郎★	森川卯八郎	森川卯八郎	森川卯八郎	森川卯八郎	
102 熊本	・井上美喜☆	井上美喜○(林田)	井上美喜	井上美喜	井上美喜	井上美喜	井上美喜	
105 熊本	佐藤信次	佐藤 信次	佐藤信次	(欠落)	佐藤信次	佐藤信次	佐藤信次	
108 熊本	・井出ツギ★	井出 ツギ	井出ツギ☆	井出ツギ	井出ツギ	井出ツギ	井出ツギ	
112 熊本	・中村カジュ☆	中村カジュ	中村カジュ	中村カジュ	中村カジュ	中村カジュ★	中村カジュ	
114 熊本	坂本榮八☆	坂本榮八	坂本榮八	坂本榮八★	坂本榮八	坂本榮八	坂本榮八	
115 熊本	上田豊吉★	上田豊吉	上田豊記★	上田豊吉☆	上田豊吉	上田豊吉	上田豊記	
117 熊本	・上田ミト☆	上田ミト	本島ミト○	本島ミト	上田ミト	上田ミト	上田ミト	
118 熊本	本島儀男★	本島儀男☆	本島義男◆	本島儀男	本島儀男	本島儀男	本島儀男	
119 熊本	中野勝治☆	中野勝治	中野勝治	中野勝治	中野勝治	中川勝治★	中野勝治	
120 熊本	・中野エト★	中野エト	中野エト☆	中野エト	中野エト	中川エト★	中野エト	
121 熊本	中野秀雄☆	中野秀雄	中野秀雄	中野秀男★	中野秀雄	中川秀雄★	中野秀男	
125 熊本	勇豊吉★	勇 豊吉	勇豊吉	勇豊吉	勇豊吉☆	勇豊吉	勇豊吉	
127 熊本	・山中ミドリ☆	山中ミドリ	山中ミドリ	山中ミドリ	山中ミドリ	山中ミトリ★	山中ミトリ	
139 熊本	上田卯次郎☆	上田卯太郎★	上田卯次郎	上田卯次郎	上田卯次郎	上田卯次郎	上田卯次郎	
146 熊本	・橋口タニ☆	橋口タニ	香山タニ○	橋口タニ	橋口タニ	橋口タニ	橋口タニ	
148 熊本	村崎豊重★	村崎豊重	村崎豊重	村崎豊重	村崎豊重☆	村崎豊重	村崎豊重	
154 熊本	・松永ツネ☆	松永ツネ	松永ツネ	松永ツネ	松永ツネ	松永ツネ★	松永ツネ	
160 広島	・神田シヅノ★	神田シヅノ◆	神田シヅノ☆	神田シヅノ	神田シヅノ	神田シヅノ	神田シヅノ	
164 広島	上元興吉☆	上元興吉	上元興吉★	上元興吉	上元興吉	上元興吉	上元興吉	
167 広島	K 来原又喜☆	来原又喜	来原又喜	来原又喜	東原又喜★	来原又喜◆	来原又喜	
168 広島	K 来原コナミ☆	来原コナミ	来原コナミ	来原コナミ	東原コナミ★	来原コナミ	来原コナミ	
169 広島	臼井介仁☆	臼井介仁	臼井介人★	臼井介仁	臼井介仁	臼井介仁	臼井介仁	
171 広島	梶山島園☆	梶山島園	梶山島園	梶山島園	梶山島園★	梶山島園◆	梶山島園	
172 広島	大藤榮太郎☆	大藤榮太郎	大藤榮太郎	大藤榮太郎	大藤榮太郎	大藤榮太郎★	大藤榮太郎	
176 広島	中村直松☆	中村直松	中村直松	中村直松	中松直松★	中村直松	中村直松	
181 広島	山本榮次郎☆	山本榮次郎	山本榮次郎	山本榮次郎	山本榮次郎	山本榮次郎★	山本榮次郎	
183 広島	・山田ヲリエ☆	山田ヲリエ	山田オリエ★	山田ヲリエ	山田ヲリエ	山田ヲリエ	山田ヲリエ	
185 広島	田尻龜太郎☆	田尻龜太郎	田尾龜太郎★	田尻龜太郎	田尻龜太郎	田尻龜太郎◆	田尻龜太郎	
188 広島	小下序三郎☆	小下序三郎	小下序三郎	小下序三郎	小下序三郎	小下序三郎★	小下序三郎	
190 広島	・畠田ナナヨ☆	畠田ナナヨ	畠田ナ、ヨ★	畠田ナナヨ	畠田ナナヨ	畠田ナ、ヨ	畠田ナ、ヨ	
192 広島	池田彌市★	池田彌市☆	池田彌市	池田彌市	池田彌市	池田彌市	池田彌市	
193 広島	・池田アサノ★	池田アサノ☆	池田アサノ	池田アサノ	池田アサノ	池田アサノ	池田アサノ	
197 広島	楠本登一★	楠本登一	楠本登市☆	楠本管一◆	楠本登市	楠本登一	楠本登一	
199 宮城	・遠藤キヨス☆	遠藤キヨス	遠藤きよす★	遠藤キヨス	遠藤キヨス	遠藤きよす	遠藤きよす	
200 宮城	・遠藤ユキ☆	遠藤ユキ	遠藤ゆき★	遠藤ユキ	遠藤ユキ	遠藤ゆき	遠藤ゆき	
202 宮城	・目黒ヨソジ☆	目黒ヨソジ	目黒よそじ★	目黒ヨソジ	目黒ヨソジ	目黒よそじ	目黒よそじ	
205 宮城	深町千代蔵☆	深町千代蔵	深町千代蔵	深町千代蔵	深町千代蔵	深町千代蔵★	深町千代蔵	
209 東京府	・茨木チヨ☆	茨木チヨ	茨木ちよ★	茨木チヨ	茨木チヨ	茨木ちよ	茨木チヨ	
212 沖縄	T 玉城カマ☆	玉城カマ	玉城カマ	玉城カマ	玉城カマ	玉城カマ★	玉城カマ	玉城カマ
216 沖縄	T 玉那覇武太☆	玉那覇 武太	玉那覇武太	玉那覇武太	玉那覇武太	玉那覇武太	玉那覇善信	玉那覇善信★
220 沖縄	S 島袋五郎☆	島袋 五郎	島袋五郎	島袋五郎	島袋五郎	島袋五郎★	島袋五郎	島袋五郎
222 沖縄	S 末吉徳兵衛☆	末吉 徳兵衛	末吉徳兵衛	末吉徳兵衛	末吉徳兵衛	末吉徳兵衛	末吉徳兵衛	末吉徳兵衛★
224 沖縄	N 名嘉釜助○	名嘉釜助/文五郎○	名嘉久五郎◆	名嘉文五郎☆	名嘉文五郎	名嘉文五郎	名嘉文五郎	名嘉文五郎
228 沖縄	N 仲宗根蒲☆	仲宗根 蒲	仲曾根蒲★	仲宗根蒲	仲宗根蒲	仲宗根蒲	仲宗根蒲	仲宗根蒲
229 沖縄	C 知念仁牛☆	知念 仁牛★	知念仁牛	知念仁牛	知念仁牛	知念仁牛	知念仁牛	知念仁牛
230 沖縄	N 新川善助☆	新川 善助	大城善助★?	新川善助	新川善助	新川善助	新川善助	新川善助
232 沖縄	T 外間加眞☆	外間 加眞	外間加眞	外間加眞	外間加眞	外間加眞	外間加眞	外間加眞
234 沖縄	M 銘珥蒲★	澤珥蒲☆	銘珥蒲	澤珥蒲	銘珥蒲	銘珥蒲	銘珥蒲	銘珥蒲◆
235 沖縄	M 銘珥直道☆	銘珥 直道	銘珥直道	銘珥眞通★	銘珥直道	銘珥眞通◆	銘珥直道	銘珥眞通
236 沖縄	O 翁長三郎☆	翁長三良★	翁長三良	翁長三郎	翁長三郎	翁長三郎	翁長三良	翁長三良
237 沖縄	O 翁長仁要☆	翁仁要★	翁長仁要	翁仁要	翁(?)仁要	翁長仁要	翁長仁要	翁長仁要
240 沖縄	S 澤珥太郎☆	澤珥太郎	澤珥太郎	澤珥太郎	澤珥太郎	沢珥太郎★	澤珥太郎	沢珥太郎
248 沖縄	K 龜山朝伸☆	龜山朝伸	神田朝伸★	龜山朝伸◆	龜山朝伸	龜山朝伸	神田朝伸	龜山朝伸
250 沖縄	S 佐久間龜★	佐久間龜	佐久間龜	佐久田龜☆	佐久田龜	佐久田龜	佐久間龜	佐久田龜
251 沖縄	S 佐久間カメ★	佐久間 カメ	佐久間カメ	佐久田カメ☆	佐久田カメ	佐久田カメ	佐久間カメ	佐久田カメ
252 沖縄	K 古波蔵龜☆	古波蔵龜	古波蔵龜	古波蔵龜	古波蔵龜	石波蔵龜★	古波蔵龜	古波蔵龜
253 沖縄	Y 安里宇志☆	安里 宇志	安里宇志★	安里宇志	安里宇志	安里宇志	安里宇志	安里宇志
255 沖縄	K 古波蔵賀眞☆	古波蔵 賀眞	古波蔵賀眞	古波倉賀眞★	古波蔵賀眞	古波蔵賀眞	古波蔵賀眞	古波蔵賀眞
261 沖縄	H 比嘉三良☆	比嘉 三良	比嘉三郎★	比嘉三良	比嘉 三良	比嘉 三良	比嘉 三良	比嘉 三良
264 沖縄	H 比嘉牛☆	比嘉 牛	比嘉山★	比嘉牛	比嘉牛	比嘉牛	比嘉山	比嘉牛
268 沖縄	H 比嘉宗正☆	比嘉 宗正★	比嘉宗正	比嘉宗正	比嘉宗正	比嘉宗正	比嘉宗正	比嘉宗正
278 沖縄	H 比嘉松☆	比嘉 松	比嘉松	比嘉松	比嘉松	比嘉松	比加松★	比嘉松
279 沖縄	H 比嘉山☆	比嘉 山	比嘉山	比嘉山	比嘉山	比嘉山	比加山★	比嘉山
287 沖縄	K 喜屋武龜☆	喜屋武龜	喜屋武蒲★	喜屋武龜	喜屋武龜	喜屋武カメ◆	喜屋武蒲	喜屋武蒲
302 沖縄	S 島袋利孝☆	島袋 利孝	島袋利光★	島袋利孝	島袋利孝	島袋利孝	島袋利光	島袋利孝

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
	かさど丸名簿	かさど丸 耕地名簿	移民四十年史 配耕地名簿	マイクロ 名簿カード	『外交史料』 毛筆記録	皇国殖民 届け出	25周年 記念鑑	沖縄県 出身者名簿
303 沖繩	M 宮城伊八☆	宮城 伊八	宮里伊八★	宮城伊八	宮城伊八	宮城伊八	宮城伊八	宮城伊八
312 沖繩	T 高江州義勝☆	高江州 義勝	高江州義勝	高江州義勝	高江州義勝	高江州義勝★	高江州義勝	高江州義勝
313 沖繩	T 高江州義廷☆	高江州 義廷	高江州義廷	高江州義廷	高江州義廷	高江州義廷★	高江州義廷	高江州義廷
316 沖繩	T 高江州義好☆	高江州 義好	高江州義好	高江州義好	高江州義好	高江州義好★	高江州義好	高江州義好
317 沖繩	Y 吉元三良☆	吉元 三良	吉元三良	吉元三良	吉元三良	吉元三良	吉元三良	吉元三良★
318 沖繩	Y・吉元ツル☆	吉元 ツル	吉元ツル	吉元ツル	吉元ツル	吉元ツル	吉元ツル	吉元ツル★
319 沖繩	N 仲宗根 蒲☆	仲宗根 蒲	仲曾根蒲★	仲宗根蒲	仲宗根蒲	仲宗根蒲	仲宗根蒲	仲宗根蒲
320 沖繩	N 仲宗根蒲☆	仲宗根 蒲	仲曾根カマ★(男)	仲宗根蒲	仲宗根蒲	仲宗根蒲	仲宗根蒲	仲宗根蒲
321 沖繩	N 仲宗根牛☆	仲宗根 牛	仲曾根牛★	仲宗根牛	仲宗根牛	仲宗根牛	仲宗根牛	仲宗根牛
323 沖繩	S・島袋ナベイ☆	島袋 ナベイ	島袋ナベ★	島袋ナベイ	島袋ナベイ	島袋ナベイ	島袋ナベイ	島袋ナベイ
326 沖繩	S 島袋三良☆	島袋 三良	島袋三良	島袋三良★	島袋三良	島袋三良	島袋三良	島袋三良
329 沖繩	A 當間嗣龜☆	當間 嗣龜	當間嗣龜	當間嗣龜	當間嗣龜★	當間嗣龜	當間嗣龜	當間嗣龜
331 沖繩	I 伊波加那☆	伊波 加那	(欠落)	伊波加那	伊波加那	伊波加那	伊波加那	伊波加那
332 沖繩	G 儀保蒲☆	儀保 蒲	儀保蒲	儀保蒲	儀保蒲	儀保蒲	儀保蒲	儀保蒲
333 沖繩	G・儀保カマト☆	儀保 カマト	儀保カマト	儀保カマト★	儀保カマト◆	儀保カマト	儀保カマト	儀保カマト
336 沖繩	S 新垣松数☆	新垣松数	新垣松数	新垣松数	新垣松数★	新垣松数	新垣松数	新垣松数
338 沖繩	T 平戸山戸★	平戸 山戸	平良山戸☆	平良山戸	平戸山戸	平戸山戸	平良山戸	平良山戸
339 沖繩	N 中宗根牛★	中宗根 牛	仲曾根牛◆	中宗根牛	中宗根牛	仲宗根牛☆	仲宗根牛	仲宗根牛
340 沖繩	N・中宗根カメ★	中宗根 カメ	仲曾根カメ◆	中宗根カメ	中宗根カメ	仲宗根カメ☆	仲宗根カメ	仲宗根カメ
341 沖繩	C 知念蒲☆	知念 蒲	知念蒲	知念蒲★	知念蒲	知念蒲	知念蒲	知念蒲
342 沖繩	C 知念武太☆	知念 武太	知念武太	知念武太★	知念武太	知念武太	知念武太	知念武太
343 沖繩	C 知念蒲☆	知念 蒲	知念蒲	知念蒲★	知念蒲	知念蒲	知念蒲	知念蒲(龜)
344 沖繩	O 奥間政廷☆	奥間 政廷	奥間政廷★	奥間政廷	奥間政廷	奥間政廷	奥間政廷	奥間政廷
345 沖繩	C 知念松☆	知念 松	知念松	知念松★	(不在)	知念松	知念松	知念松
347 沖繩	S・崎山カメ☆	崎山 カメ	崎山ガメ★	崎山カメ	崎山カメ	崎山カメ	崎山カメ	崎山カメ
348 沖繩	G 饒波必達☆	饒波 必達	饒波必達	饒波必達	饒波必達★	饒波必達	饒波必達	饒波必達
350 沖繩	N 仲宗根蒲助☆	仲宗根 蒲助	仲曾根蒲助★	仲宗根蒲助	仲宗根蒲助	仲宗根蒲助	仲原根蒲助◆	仲宗根蒲助
353 沖繩	K・金城カマド☆	金城 カマド	金城カマト★	金城カマド	金城カマド	金城カマド	金城カマド	金城カマト
357 沖繩	H 平安名次郎☆	平安名次郎	平安名次郎	平安名次郎	平安名次郎	平安名次郎	平安名次郎	平安名次良★
358 沖繩	H・平安名カメイ☆	平安名 カメイ	平安名カメ★	平安名カメイ	平安名カメイ◆	平安名カメイ	平安名カメイ	平安名カメイ
362 沖繩	K 古謝國禎☆	古謝 國禎	古謝國禎	古謝國禎	古謝國禎	古謝國禎★	古謝國禎	古謝國禎
363 沖繩	G 城間眞次郎☆	城間 眞次郎	城間眞次郎	城間眞次郎★	城間眞次郎	城間眞次郎★	城間眞次郎	城間眞次郎
365 沖繩	J 城間鉄夫☆	城間 鉄夫	城間鉄夫★	城間鉄夫	城間鉄夫	城間鉄夫	城間鉄夫	城間鉄夫
366 沖繩	K 神里妻平☆	神里 妻平	神里妻平	神里妻平★	神里妻平	神里妻平	神里妻平	神里妻平
372 沖繩	Z 瑞慶覧長義☆	瑞慶覧 長義	瑞慶覧長義★	瑞慶覧長義	瑞慶覧長義	瑞慶覧長義	瑞慶覧長義	瑞慶覧長義
375 沖繩	K・金城カメサ☆	金城 カメサ	金城カメ★	金城カメサ	金城カメサ	金城カメサ	金城カメ	金城カメ
380 沖繩	K 金城オサ☆	金城 オサ	金城ウサ★	金城オサ	金城オサ	金城オサ	金城ウサ	金城オサ
381 沖繩	O 大城判四郎★	大城 判四郎☆	大城判四郎	大城判四郎	大城判四郎	大城判四郎	大城判四郎	大城判四郎
382 沖繩	O 大城實太郎☆	大城 實太郎	大城實太郎	大城実太郎★	大城實太郎	大城實太郎	大城實太郎	大城実太郎
387 沖繩	M 宮城眞吉☆	宮城 眞吉	宮城眞吉★	宮城眞吉◆	宮城眞吉	宮城眞吉	宮城眞吉	宮城眞吉
389 沖繩	K 金城萬助☆	金城 萬助	金城萬助	金城万助★	金城萬助	金城萬助	金城萬助	金城萬(万)助
393 沖繩	N 仲村渠孫徳●	赤嶺 供儀○	仲村渠孫徳★	仲村渠孫徳	仲村渠孫徳	仲村渠孫徳	仲村渠孫徳	仲村渠孫徳
397 沖繩	K 興座敬三郎★	興座 敬三郎	興座敬三郎☆	興座 敬三郎	興座敬三郎	興座敬三郎	興座敬三郎	興座敬三郎
398 沖繩	K 金城義平☆	金城 義平★	金城義平	金城義平	金城義平	金城義平	金城義平	金城義平
399 沖繩	K 興座音六★	興座 音六	興座音六☆	興座音六	興座音六	興座音六	興座音六	興座音六
405 沖繩	T 玉城眞吾☆	玉城 眞吾	玉城眞吾	玉城眞吉★	玉城眞吾	玉城眞吾◆	玉城眞吾	玉城眞吾
409 沖繩	K 具志幸七☆	具志 幸七	具志幸七★	具志幸七	具志幸七	具志幸七	具志幸七	具志幸七
410 沖繩	C 知念次郎☆	知念 次郎	知念次郎	知念次郎★	知念次郎	知念次郎	知念次郎	知念次郎
412 沖繩	T・外間ミト☆	外間 ミト	外間トミ★	外間ミト	外間ミト	外間ミト	外間ミト	外間ミト
413 沖繩	A 赤嶺喜佐☆	赤嶺 喜佐	赤嶺喜佐★	赤嶺喜佐	赤嶺喜佐	赤嶺喜佐	赤嶺喜佐	赤嶺喜佐
416 沖繩	O 太田龜☆	太田 龜	太田龜	太田龜	太田龜	太田龜	太田龜	太田龜
424 沖繩	G 宜保弘齊☆	宜保 弘齊	儀保喜正★	宜保弘齊	宜保弘齊	宜保弘齊	儀保喜正	儀保弘齊◆
431 沖繩	T 外間蒲戸☆	外間 蒲戸	儀間眞享★	儀間眞享	儀間眞享	儀間眞享★	儀間眞享	儀間眞享
433 沖繩	G 儀間眞享☆	儀間 眞享	儀間眞享	儀間眞享	儀間眞享	儀間眞享	儀間眞享	儀間眞享
439 沖繩	M 宮城眞翁☆	宮城 眞翁	宮城眞翁	宮城眞翁	宮城眞翁	宮城眞翁★	宮城眞翁	宮城眞翁
440 沖繩	N 仲本恭光☆	仲本 恭光	仲本恭光★	仲本恭光	仲本恭光	仲本恭光	仲本恭光	仲本恭光
443 沖繩	C 知念南徳☆	知念 南徳	知念南徳	知念南徳★	知念南徳	知念南徳	知念南徳	知念南徳
445 沖繩	C 知念松八☆	知念 松八	知念松八	知念松八★	知念松八	知念松八	知念松八	知念松八
446 沖繩	C 知念五郎☆	知念 五郎	知念五郎	知念五郎★	知念五郎	知念五郎	知念五郎	知念五郎
447 沖繩	N 新里三良☆	新里 三良	新里三良	新里三良★	新里三良	新里三良	新里三良	新里三良
448 沖繩	I 伊良皆成貞★	伊良 皆 成貞	伊良皆成定☆	伊良皆成定	伊良皆成定	伊良皆成定	伊良皆成定	伊良皆成定
449 沖繩	Y 安谷屋興元☆	安谷屋 興元	安谷屋興元★	安谷屋興元	安谷屋興元	安谷屋興元	安谷屋興元	安谷屋興元
450 沖繩	N 新里南吉☆	新里 南吉	新里南吉	新里南吉	新里南吉	新里南吉★	新里南吉	新里南吉
454 沖繩	K 金城加麻●	知念 次良○	金城加麻	金城加麻	金城加麻	金城加麻	金城宇志◆?	金城宇志◆?
455 沖繩	N 仲村渠常昌☆	仲村渠 常吉★	中村渠常昌◆	仲村渠常昌	仲村渠常昌	仲村渠常昌	仲村渠常昌	仲村渠常昌
456 沖繩	C 知念三良☆	知念 三良	知念三良	知念三良★	知念三良	知念三良	知念三良	知念三良
457 沖繩	C・知念ナベ☆	知念 ナミ★	知念ナベ	知念ナベ★	知念ナベ	知念ナベ	知念ナベ	知念ナベ
458 沖繩	G 宜名眞 邑一☆	宜名眞 邑一	宜名眞邑一	宜名眞邑一★	宜名眞邑一	宜名眞邑一	宜名眞邑一	宜名眞邑(巴)一
466 沖繩	M 宮城保守☆	宮城 保守★	宮城保守	宮城保守	宮城保守	宮城保守	宮城保守	宮城保守
467 沖繩	J 上江沼智武☆	上江沼 智武	上江洲智武★	上江沼智武	上江沼智武	上江沼智武	上江洲智武	上江洲智武
468 沖繩	Y 吉濱智昌☆	吉濱 智昌	吉濱智昌	吉濱知昌★	吉濱智昌	吉濱智昌	吉濱智昌	吉濱智昌
469 沖繩	N 仲里新三☆	仲里 新三	仲里新三	仲里新三	仲里新三★	仲里新三	仲里新三	仲里新三
471 沖繩	N 仲里新忠☆	仲里 新忠	仲里新忠	仲里新忠	仲里新忠	仲里新忠	仲里新忠	仲里新忠
473 沖繩	N 仲宗根宗忠☆	仲宗根 宗忠	仲宗根宗忠	仲宗根宗忠	仲宗根宗忠	仲宗根宗忠	仲宗根宗忠	仲宗根宗忠
478 沖繩	N 新里新清☆	新里 新清	仲里新清★	新里新清	新里新清	新里新清	新里新清	新里新清
481 沖繩	H 平良松六郎☆	平良 松六郎	平良松六郎	平良松六良★	平良松六郎	平良松六郎	平良松六郎	平良松六郎
486 沖繩	Y・山城タマ○	山城タマ(有銘姓)	山城タマ	山城タマ	山城タマ	山城タマ	山城タマ	山城タマ
490 沖繩	K 具志堅善吉☆	具志堅 善吉	具志堅善吉★	具志堅善吉	具志堅善吉	具志堅善吉	具志堅善吉	具志堅善吉
491 沖繩	C 知念蒲☆	知念 蒲	知念蒲	知念蒲	知念蒲	知念蒲	知念蒲	知念蒲
492 沖繩	A 安慶名トラ之助★	安慶名 トラ之助	安慶那虎之助◆	安慶名厩?の助	安慶名厩之助☆	安慶那虎之助◆	安慶那虎之助	安慶那虎之助◇

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
	かさど丸名簿	かさど丸 耕地名簿	移民四十年史 配耕地名簿	マイクロ 名簿カード	『外交史料』 毛筆記録	皇国殖民 届け出	25周年 記念鑑	沖縄県 出身者名簿
499 沖縄	N 仲井間宗昌☆	仲井間 宗昌	仲井間宗昌	仲井間宗昌	仲井間宗昌	仲井間宗昌	仲井間宗昌	仲井間憲昌★
504 沖縄	T 玉城源次郎☆	玉城源四郎★	玉里源次郎◆	玉城源次郎	玉城源四郎	玉城源次郎	玉城源次郎	玉里源次郎
505 沖縄	T 玉城平七☆	玉城幸七★	玉城幸七	玉城平七	玉城平七	玉城幸七	玉城平七	玉城平七
508 沖縄	K 上間静吉☆	上間静吉	上間静吉	上間静吉	上間静吉	上間静吉★	上間静吉	上間静吉
513 沖縄	H 比嘉永松☆	比嘉 永松	比嘉永和★	比嘉永松	比嘉永松	比嘉永和	比嘉永松	比嘉永松
514 沖縄	H 比嘉嘉那☆	比嘉 嘉那	比嘉嘉那	比嘉嘉那	比嘉嘉那	比嘉加那★	比嘉嘉那	比嘉嘉那
517 沖縄	M 宮里富一☆	宮里 富一	宮里富一	宮里富一	宮里富一★	宮里富一	宮里富一	宮里富一
525 沖縄	Y 山城保太郎☆	山城 保太郎	山城保次郎★	山城保太郎	山城保太郎	山城保次郎	山城保次郎	山城保次郎
532 沖縄	H 比嘉徳次☆	比嘉 徳次	比嘉徳次	比嘉徳治★	比嘉徳次	比嘉徳次	比嘉徳次	比嘉徳次
544 山口	久保庄右衛門☆	久保庄右衛門	久保庄右衛門	久保庄右エ門★	久保庄右衛門	久保庄右衛門	久保庄右衛門	久保庄右エ門
549 山口	寶来虎助☆	寶来虎助	寶来虎之助★	宝来虎助◆	寶来虎助	寶来虎助	寶来虎之助	寶来虎之助
550 山口	・寶来フジノ★	寶来フジノ	寶来フシノ☆	宝来フシノ★	寶来フジノ	寶来フシノ	寶来フシノ	寶来フシノ
558 山口	石村太三郎☆	石村太三郎	石村大三郎★	石村太三郎	石村太三郎	石村太三郎	石村太三郎	石村太三郎
560 山口	森弘清太郎☆	(石村)清太郎○	森弘清太郎	森弘清太郎	森弘清太郎	森弘清太郎	森弘清太郎	森弘清太郎
565 山口	沖川裕吉☆	(都会に残留)	(都会に残留)	沖川祐吉★	沖川裕吉	沖川裕吉	沖川裕吉	沖川裕吉(残)
566 愛媛	池田榮太郎☆	池田榮太郎	池田榮太郎	池田榮太郎	池田榮太郎	池田榮太郎★	池田榮太郎	池田榮太郎
569 愛媛	岡田善太郎☆	岡田善太郎	岡田善太郎	岡田義太郎★	岡田善太郎	岡田善太郎	岡田善太郎	岡田善太郎
573 愛媛	橋本重左衛門☆	橋本重左エ門★	橋本重左衛門	橋本重左衛門	橋本重左衛門	橋本重右衛門◆	橋本重左エ門	橋本重左エ門
574 愛媛	・橋本タカノ☆	橋本タカノ	橋本タカノ	橋本タカノ	橋本タカノ★	橋本タカノ	橋本タカノ	橋本タカノ
578 愛媛	・近藤タケ☆	近藤タケ	近藤タチ★	近藤タケ	近藤タケ	近藤タケ	近藤タチ	近藤タチ
579 愛媛	近藤常吉☆	近藤常吉	井上常吉○	井上常吉	近藤常吉	近藤常吉	井上常吉	井上常吉
584 愛媛	・芳我トミエ☆	芳我トミエ	芳我トミエ	芳我トミエ	芳我トミエ	芳我トミエ★	芳我トミエ	芳我トミエ
585 愛媛	芳我松衛☆	芳我松衛	芳我松衛	芳我和衛★	芳我松衛	芳我松衛	芳我松衛	芳我松衛
588 鹿児島	・川畑カ子キク☆	川畑カ子キク	川畑カ子キク	川畑カネキク★	川畑カ子キク	川畑カ子キク	川畑カネキク	川畑カネキク
592 鹿児島	・小牧興一☆	小牧興一	小牧興一	小牧興一	小牧興一	小牧興一	小牧興一	小牧興一
593 鹿児島	小牧豊吉★	小牧豊吉(大森)	小牧豊吉	小牧豊吉	小牧豊吉☆	小牧豊吉	小牧豊吉	小牧豊吉
596 鹿児島	松山彌吉☆	松山彌吉	松山彌吉	松山弥吉★	松山彌吉	松山弥吉	松山彌吉	松山彌吉
597 鹿児島	濱崎當五郎☆	濱崎當五郎	濱崎當五郎	濱崎當五郎	濱崎當五郎★	濱崎當五郎◆	濱崎當五郎	濱崎當五郎
598 鹿児島	・濱崎トセ☆	濱崎トセ	濱崎トセ	濱崎トセ	濱崎トセ	濱崎トセ★	濱崎トセ	濱崎トセ
599 鹿児島	濱崎岩次郎☆	濱崎岩次郎	濱崎岩次郎	濱崎岩次郎	濱崎岩次郎	濱崎岩次郎★	濱崎岩次郎	濱崎岩次郎
602 鹿児島	永山吉左衛門☆	永山吉左衛門	永山吉左エ門★	永山吉左エ門	永山吉左エ門	永山吉左衛門	永山吉左エ門	永山吉左エ門
603 鹿児島	清水直吉☆	清水直吉	清水直吉	清水直吉	清水直吉	清水直吉	清水直吉	清水直吉
610 鹿児島	・森トエ☆	森 トエ★	森トエ	森トエ	森トエ	森トエ	森トエ	森トエ
611 鹿児島	上塘才次☆	上塘才次	上塘才吉★	上塘才次	上塘才次	上塘才次	上塘才治◆	上塘才治
613 鹿児島	・西キノ☆	西キノエ★	西キノ	西キノ	西キノ	西キノ	西キノ	西キノ
614 鹿児島	鹽原與四郎☆	鹽原與四郎	鹽原與次郎★	塩屋与四郎◆	鹽原與四郎	塩原與四郎◇	塩原與次郎▼	塩原與次郎
620 鹿児島	・松山ムメ☆	松山ムノ★	松山ムメ	松山ムメ	松山ムメ	松山ツメ◆	松山ムメ	松山ムメ
621 鹿児島	松山末太郎☆	松山末太郎	松山末次郎★	松山末太郎	松山末太郎◆	松山末太郎	松山末次郎	松山末次郎
623 鹿児島	・川床エダ☆	川床エダ	川床エダ	川床エダ	川床エダ	川床エダ	川床エダ★	川床エダ
624 鹿児島	川床榮二☆	川床榮二	川床榮次★	川床榮二	川床榮二	川床榮二◆	川床榮二	川床榮二
626 鹿児島	川床廣☆	川床廣	川床廣	川床広★	川床廣	川床廣	川床廣	川床廣
634 鹿児島	・末永サエ☆	末永サエ★	末永サエ	末永サエ	末永サエ	末永サエ	末永サエ	末永サエ
635 鹿児島	大原藤右衛門☆	大原藤右衛門	大原藤右エ門★	大原藤右エ門	大原藤右エ門	大原藤右衛門	大原藤右エ門	大原藤右エ門
636 鹿児島	貴島七郎☆	貴島七郎	貴島七郎	貴島七郎	貴島七郎	貴島七郎	貴島七郎	貴島七郎
637 鹿児島	・貴島ムデ☆	貴島ムデ	貴島ムデ	貴島フデ◆	貴島ムデ	貴島フデ	貴島フデ	貴島フデ
638 鹿児島	・貴島カル☆	貴島カル	貴島カル	貴島カル★	貴島カル	貴島カル	貴島カル	貴島カル
639 鹿児島	貴島明次☆	貴島明次	貴島明次	貴島明次★	貴島明次	貴島明次	貴島明次	貴島明次
641 鹿児島	南興右衛門★	南興右衛門	南興右衛門☆	南興右衛門	南興右衛門	南興右衛門	南興右衛門	南興右衛門
643 鹿児島	田實五佐衛門☆	田實五佐衛門	田實五佐衛門	田實五佐衛門	田實五佐衛門	田實五佐衛門	田實五佐衛門	田實五佐衛門★
648 鹿児島	・本坊スエ☆	本坊スエ	本坊スエ	本坊スエ	本坊スエ	本坊スエ◆	本坊スエ	本坊スエ
649 鹿児島	柿木榮☆	柿木榮	柿木榮	柿木榮	柿木榮	柿木榮★	柿木榮	柿木榮
650 鹿児島	出原正蔵☆	出原正蔵	出原正蔵★	出原正蔵	出原正蔵	出原正蔵	出原正蔵	出原正蔵
651 鹿児島	・出原チヨゲサ☆	出原チヨゲサ	出原チヨゲサ★	出原チヨゲサ	出原チヨゲサ	出原チヨゲサ	出原チヨゲサ	出原チヨゲサ
652 鹿児島	有村榮☆	有村榮	有村榮	有村榮	有村榮	有村榮	有村榮	有村榮
655 鹿児島	・湯通堂タヤ☆	湯通堂タヤ	湯通堂タカ★	湯通堂タヤ	湯通堂タヤ	湯通堂タヤ	湯通堂タヤ	湯通堂タヤ
657 鹿児島	K 上敷領龜吉☆	上敷領龜吉	上敷領龜吉	上敷領龜吉	五敷領龜吉★	上敷領龜吉	上敷領龜吉	上敷領龜吉
658 鹿児島	湯ノ口歌吉☆	湯ノ口歌吉	湯ノ口歌吉	湯ノ口歌吉	湯ノ口歌吉	湯ノ口歌吉	湯ノ口歌吉	湯ノ口歌吉
659 鹿児島	・湯ノロヨシ☆	湯ノロヨシ	湯ノロヨシ	湯ノロヨシ	湯ノロヨシ	湯ノロヨシ	湯ノロヨシ	湯ノロヨシ
660 鹿児島	湯ノロ八郎☆	湯ノロ八郎	湯ノロ八郎	湯ノロ八郎	湯ノロ八郎	湯ノロ八郎	湯ノロ八郎	湯ノロ八郎
665 鹿児島	・西牟田ノキ☆	(永田)ノキ○	西牟田ノキ	西牟田ノキ	西牟田ノキ	西牟田ノキ	西牟田ノキ	西牟田ノキ
666 鹿児島	西牟田秀雄☆	(岩元)秀雄○	西牟田秀雄	西牟田秀雄	西牟田秀雄	西牟田秀雄	西牟田秀雄	西牟田秀雄
669 鹿児島	・隈元モイ☆	隈元モイ	隈元モイ	隈元モイ	隈元モイ	隈元モイ★	隈元モイ	隈元モイ
674 鹿児島	濱田長次郎☆	濱田長次郎	濱田長次郎	濱田長次郎	濱田長次郎	濱田長次郎★	濱田長次郎	濱田長次郎
677 鹿児島	桑原伊左衛門☆	桑原伊左衛門	桑原伊左衛門	桑原伊左エ門◆	桑原伊左エ門	桑田伊左衛門◆	桑原伊左エ門	桑原伊左エ門
678 鹿児島	・桑原サワ☆	桑原サワ	桑原サワ	桑原サワ	桑原サワ	桑田サワ★	桑原サワ	桑原サワ
679 鹿児島	篠原清蔵★	篠原清成	篠原清成	篠原清成	篠原清成	篠原清成	篠原清成	篠原清成
681 鹿児島	・石井アキ	伊瀬地ナツ☆	石井アキ	丸野ナツ○	石井アキ	石井アキ	石井アキ	石井アキ
682 鹿児島	原源八☆	原源八	原源八	原源八	原源七★	原源八	原源八	原源八
685 鹿児島	・草野チヨゲサ☆	草野チヨゲサ	草野チヨゲサ★	草野チヨゲサ	草野チヨゲサ	草野チヨゲサ	草野チヨゲサ	草野チヨゲサ
686 鹿児島	草野仙右衛門☆	草野仙右衛門	草野仙右衛門	草野仙右衛門	草野仙右衛門	草野仙右衛門	草野仙右エ門★	草野仙右エ門
687 鹿児島	折田喜右衛門☆	折田喜右衛門	折田喜右衛門	折田喜右衛門	折田喜右衛門	折田喜右衛門	折田喜右エ門★	折田喜右エ門
690 鹿児島	竹内宗次☆	竹内宗次	竹内宗次	竹内宗次	竹内宗治★	竹内宗次	竹内宗次	竹内宗次
692 鹿児島	竹内末吉☆	竹内末吉	竹内末吉	竹内末吉	竹内末吉	竹内末吉	竹内末吉	竹内末吉
696 鹿児島	竹内喜左衛門☆	竹内喜左衛門	竹内喜左衛門	竹内喜左エ門★	竹内喜左衛門	竹内喜左衛門	竹内喜左エ門	竹内喜左エ門
704 鹿児島	・永江ナニ☆	永江ナニ	永江ナニ★	永江ナニ	永江ナニ	永江ナニ◆	永江ナニ	永江ナニ
705 鹿児島	園田猶衛☆	(永江)猶衛○	湯の口金之助★	池上金之助	池上金之助	池上金之助	湯の口金之助◆	湯の口金之助
716 鹿児島	池上金之助☆	(今給黎)キセ○	森キセ	森キセ	森キセ	森キセ	森キセ	森キセ
718 鹿児島	・森キセ☆	今給黎矢市	今給黎矢市	今給黎矢市	今給黎矢市	今給黎矢市	今給黎矢市	今給黎矢市
719 鹿児島	今給黎矢市☆	森 マム	森マツ☆	森マツ	森マツ	森マツ	森マツ	森マツ
721 鹿児島	・森(末)マム★							

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
	かさと丸名簿	かさと丸 耕地名簿	移民四十年史 配耕地名簿	マイクロ 名簿カード	「外交史料」 毛筆記録	皇国殖民 届け出	25周年 記念鑑	沖縄県 出身者名簿
728 鹿児島	寺田善之助☆	寺田善之助	寺田善之助	寺田善之助	寺田善之助	寺田喜之助★	寺田善之助	
729 鹿児島	長谷善之助☆	長谷川善之助★	長谷善之助	長谷善之助	長谷川善之助	長谷善之助	長谷善之助	
733 鹿児島	松山榮次郎☆	松山榮次郎	松山榮次郎	松山榮次郎	松山榮次郎	松山榮次郎★	松山榮次郎	
734 鹿児島	・松山三枝★	松山三枝	松山三枝☆	松山三枝	松山三枝	松山三枝	松山三枝	
738 鹿児島	小村喜之助☆	小村喜之助	小村喜之助	小村金之助★	小村喜之助	小村喜之助	小村喜之助	
740 鹿児島	・瀬戸上キエ☆	瀬戸上キエ★	瀬戸上キエ	瀬戸上キエ	瀬戸上キエ	瀬戸上キエ	瀬戸上キエ	
743 鹿児島	川原敏吉☆	川原敏吉	川原敏吉★	川原敏吉	川原敏吉	川原敏吉	川原敏吉	
749 鹿児島	前原藤次郎☆	前原藤次郎	前原藤次郎★	前原藤次郎	前原藤次郎	前原藤次郎	前原藤次郎	
750 鹿児島	柳村矢吉☆	柳村矢吉	柳村矢吉★	柳村矢吉	柳村矢吉	柳村矢吉	柳村矢吉	
751 鹿児島	宮田勝衛☆	宮田勝衛	宮田勝衛★	宮田勝衛	宮田勝衛	宮田勝衛	宮田勝衛	
752 鹿児島	松元熊武☆	松元熊武	松本熊武★	松本熊武	松元熊武	松元熊武	松本熊武	
754 鹿児島	竹内袈裟次郎☆	竹内袈裟次郎	竹内袈裟次郎	竹内袈裟次郎★	竹内袈裟次郎	竹内袈裟次郎◆	竹内袈裟次郎	
755 鹿児島	原口貞助☆	{都会に残留}	{都会に残留}	原口貞助	原口貞助	原口貞助	原口貞助★(残)	
756 鹿児島	鮫島直哉	{都会に残留}	{都会に残留}	鮫島直哉	鮫島直哉	鮫島直哉	鮫島直哉(残)	
757 鹿児島	池上二次郎	{都会に残留}	{都会に残留}	池上二次郎	池上二次郎	池上二次郎	池上二次郎(残)	
758 鹿児島	・池上美彌☆	{都会に残留}	{都会に残留}	池上美彌	池上美彌	池上美彌	池上美彌★(残)	
759 高知	窪内三次☆	窪内三次	窪内三次★	窪内三次	窪内三次	窪内三次	窪内三次	
760 高知	・窪内國衛☆	窪内國衛	窪内國衛★	窪内國衛	窪内國衛	窪内國衛	窪内國衛	
762 高知	門田一美☆	門田一美	門田一美	門田一美	門田一美★	門田一美	門田一美	
766 高知	山本喜平☆	山本喜平	山本喜市★	山本喜平	山本喜平	山本喜平	山本喜平	
768 高知	鍋島喜代重☆	鍋島喜代重	鍋島喜代重	鍋島喜代重★	鍋島喜代重	鍋島喜代重	鍋島喜代重	
769 高知	鍋島寅義☆	鍋島寅義	鍋島寅義	鍋島寅義★	鍋島寅義	鍋島寅義	鍋島寅義	
771 高知	長野鹿次○	{都会に残留}	{都会に残留}	長野鹿次	鍋島寅義	鍋島寅義	鍋島寅義	
772 高知	森勝利○	{都会に残留}	森勝利	森勝利	森勝利	森勝利	森勝利	
773 新潟	菅原雄次☆	菅原雄次	菅原雄次★	菅原雄次	菅原雄次	菅原雄次	菅原雄次	
775 新潟	S 菅原定三郎☆	菅原定三郎	菅原定三郎	菅原定三郎	菅原定三郎	菅原定三郎★	菅原定三郎	
776 新潟	S 神田榮太郎☆	神田榮太郎	神田榮太郎	神田榮太郎★	神田榮太郎	神田榮太郎	神田榮太郎	

J-1 兵庫	鞍谷半三郎	自由移民	J-11	水野龍	皇国殖民会社
J-2 熊本	香山六郎	自由移民	J-20	安田商店員	商店員・便乗
J-3 兵庫	・鞍谷イノ	自由移民	J-12	上塚周平	皇国殖民会社
J-3 兵庫	鞍谷誠一郎	自由移民	J-13	・大野松子(マツ)	通訳の妻
J-4 兵庫	飯田又一	自由移民	J-14	・仁平ツナ子(綱)	皇国殖民会社
J-5 高知	片岡治義	自由移民	J-15	三原万次郎	水野の息子
J-6 高知	片岡秀於	自由移民	J-16	柏木(不明)	花火の技術者
J-7 高知	片岡光章	自由移民	J-17	瀧波文平	商店主・便乗
J-8 山形	高桑治兵衛	自由移民	J-18	安田商会主人	商店主・便乗
J-9 長野	矢崎節夫	自由移民	J-19	安田商店員	商店員・便乗
			J-21	金澤一郎	東洋汽船通訳

太字は夫婦または家長をしめす。*、**は身代わり渡航である。

●はブラジルに行かなかったと見られる。○は改姓による。

☆はおそらくこれが正しい。★は別表記。◆は第2の別表記。

8 種の名簿で共通の氏名

1 福島	安田俊平	147 熊本	橋口敏信	297 沖縄	比嘉徳松	470 沖縄	・仲里ウシ	612 鹿児島	西吉太郎
2 福島	・安田コノ	150 熊本	・濱田トヨ	298 沖縄	玉城加那	472 沖縄	仲里新志	615 鹿児島	有水藤太郎
3 福島	松本源八	151 熊本	堀田徳平	299 沖縄	大城龜	474 沖縄	島袋幸助	616 鹿児島	・有水梅鶴
4 福島	武田茂吉	152 熊本	宮本久記	300 沖縄	宮里龜	475 沖縄	仲村善三郎	617 鹿児島	有水権四郎
5 福島	・武田タツ	153 熊本	松永二三	301 沖縄	・宮里カマト	476 沖縄	松田太郎	618 鹿児島	中小路 健
8 福島	根本清五郎	149 熊本	濱田太作	304 沖縄	大城朝義	477 沖縄	仲村善篤	619 鹿児島	松山盛吉
10 福島	・安齊トラ	155 熊本	宮崎万作	305 沖縄	山入達立仁	479 沖縄	與那嶺仁五郎	622 鹿児島	川床榮吉
12 福島	本田幸七	156 広島	山野仁一	306 沖縄	比嘉浦	480 沖縄	・與那嶺カマダ	625 鹿児島	・川床イセマツ
13 福島	・本田サノ	157 広島	・山野フサヨ	307 沖縄	池原次郎	482 沖縄	津波新次郎	627 鹿児島	川床太吉
14 福島	本田幸四郎	158 広島	山野政一	308 沖縄	島袋浦	483 沖縄	上原直松	628 鹿児島	牧之段愛熊
16 福島	渡邊熊之助	159 広島	神田寅三	309 沖縄	・島袋カマ	484 沖縄	島袋 榮一	629 鹿児島	・牧之段ツタ
18 福島	香野賢良	161 広島	須山勘一	310 沖縄	金城徳	485 沖縄	山城楓一郎	630 鹿児島	牧之段次太郎
19 福島	佐藤市四郎	162 広島	西村房吉	311 沖縄	石原昌三	487 沖縄	山城甚三郎	631 鹿児島	末永傳吉
20 福島	・佐藤サン	163 広島	・西村ワイ	314 沖縄	池原文鳳	488 沖縄	金城双三	632 鹿児島	・末永ミツ
21 福島	齊藤丑松	165 広島	清寺保吉	315 沖縄	島袋利藏	489 沖縄	仲地甚八	633 鹿児島	末永廣
22 福島	山田末吉	166 広島	・清寺ユキノ	322 沖縄	島袋松	493 沖縄	座覇政憲	640 鹿児島	加藤圭助
23 福島	・山田タニ	170 広島	・臼井マサヨ	324 沖縄	伊波龜	494 沖縄	・座覇ウト	642 鹿児島	橋口七兵衛
24 福島	山田留七	173 広島	車池朝一	325 沖縄	島袋徳	495 沖縄	仲程仙五郎	644 鹿児島	宇都愛助
25 福島	山田留五郎	174 広島	中村増一	327 沖縄	・島袋カメ	496 沖縄	仲程清太郎	645 鹿児島	柿木三四郎
29 福島	鍋谷末次郎	175 広島	中村四郎	328 沖縄	大城松	497 沖縄	仲程清四郎	646 鹿児島	・柿木ミツ
30 福島	・鍋谷ツメ	177 広島	山根榮次郎	330 沖縄	伊波加那	498 沖縄	玉城傳吉	647 鹿児島	本坊清吉
32 福島	岩本庄三郎	178 広島	間崎三三一	334 沖縄	宮城加那	500 沖縄	玉城仙三郎	653 鹿児島	有村立衛
33 福島	・岩本ヒサ	179 広島	若林五郎市	335 沖縄	兼城松	501 沖縄	宮城幸四郎	654 鹿児島	湯通堂松五郎
34 福島	岩本正之進	180 広島	山田甚太郎	337 沖縄	宮城松助	502 沖縄	・宮城ナベ	656 鹿児島	湯通堂傳藏
36 福島	岩本介三郎	182 広島	山田勘一	346 沖縄	崎山並吉	503 沖縄	大城孫四郎	661 鹿児島	王子田政吉
37 福島	渡邊吉江	184 広島	山田實藏	349 沖縄	古謝三良	506 沖縄	山里要四郎	662 鹿児島	・王子田計佐松
41 福島	渡邊七之助	186 広島	小下仁蔵	351 沖縄	山田三良	507 沖縄	比嘉久一	663 鹿児島	上川路 喜八
42 福島	・渡邊ケサ	187 広島	・小下ナカ	352 沖縄	金城太二	509 沖縄	山入端川秀	664 鹿児島	西牟田實
43 福島	平儀祐	189 広島	島田傳之助	354 沖縄	金城龜	510 沖縄	・山入端ウシ	667 鹿児島	山下一雄
44 福島	三浦喜和馬	191 広島	今田軍司	355 沖縄	宮平松	511 沖縄	岸本謙一	668 鹿児島	隈元維高

50	福島	渡邊又吉	194	広島	児玉良一	356	沖縄	城間米藏	512	沖縄	比嘉安元	670	鹿児島	上原武次
51	福島	・渡邊トミ	195	広島	笹谷松太郎	360	沖縄	吉濱加那	515	沖縄	比嘉眞永	671	鹿児島	山形元吉
53	福島	三浦今朝治	196	広島	植木玉市	361	沖縄	前川益	516	沖縄	神山徳助	672	鹿児島	・山形セイ
54	福島	・三浦ケサ	198	宮城	遠藤豊之助	359	沖縄	榮門松	518	沖縄	岸本松吉	673	鹿児島	山形浅吉
55	福島	穴戸源助	201	宮城	目黒静	364	沖縄	・城間カメ	519	沖縄	宮平牛助	675	鹿児島	・濱田ナカ
56	福島	佐伯國次郎	203	宮城	目黒連治	367	沖縄	大城武一	520	沖縄	・宮平カメ	676	鹿児島	濱田計佐次郎
57	福島	・佐伯トキ	204	宮城	大和安之助	368	沖縄	比嘉仲直	521	沖縄	比嘉善太郎	680	鹿児島	石井愛之助
58	福島	釘本賢	206	宮城	相澤直藏	369	沖縄	城間佐一郎	522	沖縄	山城武太	683	鹿児島	伊瀬地麟造
59	福島	宇佐見基	207	宮城	工藤文太郎	370	沖縄	・城間カメ	523	沖縄	比嘉松助	684	鹿児島	草野基助
61	福島	・高橋スエ	208	東京府	茨木友次郎	371	沖縄	長嶺加那	524	沖縄	玉城登嘉	688	鹿児島	・折田ハル
62	福島	菅野忠七	210	東京府	茨木信太郎	373	沖縄	上原 山	526	沖縄	宮城利三郎	689	鹿児島	折田留吉
64	福島	星清藏	211	沖縄	玉城仁王	374	沖縄	金城由三郎	527	沖縄	嘉陽宗貞	691	鹿児島	・竹内トメ
65	福島	・星ノイ	213	沖縄	屋宜加那	376	沖縄	金城代三郎	528	沖縄	・嘉陽マス	693	鹿児島	川口榮助
66	福島	星喜六	214	沖縄	新垣龜	377	沖縄	・金城ウシ	529	沖縄	嘉陽宗源	694	鹿児島	・川口キク
67	福島	鎌田信一郎	215	沖縄	金城武一	378	沖縄	大城俊一郎	530	沖縄	比嘉梅助	695	鹿児島	川口吉次郎
68	福島	島喜十	217	沖縄	又吉龜	379	沖縄	金城善助	531	沖縄	比嘉秀吉	697	鹿児島	・竹内マツエ
69	福島	・島セキ	218	沖縄	呉屋仁和	383	沖縄	儀保清太	533	沖縄	島袋善五郎	698	鹿児島	竹内庄吉
70	福島	・島ハツ	219	沖縄	・呉屋ウト	384	沖縄	新垣美三郎	534	沖縄	宮城仁助	699	鹿児島	日高喜作
71	福島	渡邊長四郎	221	沖縄	金城睦仁	385	沖縄	宮城榮良	535	沖縄	松田貞七	700	鹿児島	・日高セキ
72	福島	・渡邊トメ	223	沖縄	新城尚助	386	沖縄	大城幸梅	536	山口	藤井佐平	701	鹿児島	石田納助
73	福島	渡邊吉之助	225	沖縄	大城仁牛	388	沖縄	大城照太郎	537	山口	・藤井ハナ	702	鹿児島	折田慶二
74	福島	山本清五郎	226	沖縄	・大城ナベ	390	沖縄	・金城カマト	538	山口	・松田ミチ	703	鹿児島	永江誠藏
75	福島	只野儀助	227	沖縄	玉那覇龜	391	沖縄	金城庄戸	539	山口	林愛之助	706	鹿児島	林榮次郎
78	熊本	大村千太郎	231	沖縄	嘉牛刈加那	392	沖縄	金城山戸	540	山口	・林 トモ	707	鹿児島	・林タツエ
79	熊本	・大村サカ	233	沖縄	・外間カメ	394	沖縄	仲座健徳	541	山口	林岩松	708	鹿児島	上村泰造
80	熊本	大村貞男	238	沖縄	宮里盛秀	395	沖縄	金城彦助	542	山口	久保吉松	709	鹿児島	竹内善兵衛
81	熊本	西島仁作	239	沖縄	・宮里ウト	396	沖縄	・金城カメ	543	山口	・久保タヨ	710	鹿児島	茶屋政吉
82	熊本	藤本末人	241	沖縄	渡久地政人	400	沖縄	赤嶺蒲	545	山口	伊藤儀三郎	711	鹿児島	・茶屋エダ
84	熊本	出口伊三次	242	沖縄	松本松	401	沖縄	新垣茂一	546	山口	・伊藤シカ	712	鹿児島	茶屋政雄
85	熊本	中川仁蔵	243	沖縄	崎間龜	402	沖縄	・新垣マカト	547	山口	藤井仁助	713	鹿児島	本多誠二
86	熊本	・中川トキ	244	沖縄	田場蒲戸	403	沖縄	大城龜三郎	548	山口	・藤井アサ	714	鹿児島	・本多ツヨ
87	熊本	中川五百樹	245	沖縄	・田場ウシ	404	沖縄	玉城禮平	551	山口	藤本秀男	715	鹿児島	池上恒則
91	熊本	西村光次	246	沖縄	天願蒲	406	沖縄	嘉數龜一	552	山口	河村輔三郎	717	鹿児島	森友衛
92	熊本	・西村キヨ	247	沖縄	神田蒲	407	沖縄	・嘉數カメ	553	山口	・河村ヨシ	720	鹿児島	森末次郎
93	熊本	・西村コト	249	沖縄	喜屋武加那	408	沖縄	大田向雪	554	山口	・山城キサ	722	鹿児島	岩崎喜次郎
94	熊本	・西村トモ	254	沖縄	城間錦喜	411	沖縄	外間龜	555	山口	福原甚一	723	鹿児島	安田徳次
95	熊本	・西村トミ	256	沖縄	玉城龜	414	沖縄	大城良宗	556	山口	・福原イマ	724	鹿児島	・安田サエ
96	熊本	島村七蔵	257	沖縄	古波藏巖	415	沖縄	大城宗人	557	山口	福原小助	725	鹿児島	安田豊次
98	熊本	元田勤助	258	沖縄	比嘉山	417	沖縄	・新垣カマト	559	山口	・石村モミ	726	鹿児島	蒲地長之助
99	熊本	比嘉傳八	259	沖縄	・比嘉カマ	418	沖縄	大城幸喜	561	山口	片岡嘉一	727	鹿児島	・蒲地ミサ
101	熊本	・森川ミカ	260	沖縄	比嘉加那一	419	沖縄	・大城カメ	562	山口	・片岡キク	730	鹿児島	原源之助
103	熊本	東松太郎	262	沖縄	比嘉龜	420	沖縄	外間長信	563	山口	山本勤治	731	鹿児島	・原トキヨ
104	熊本	・東ミツ	263	沖縄	新垣山	421	沖縄	大城加那	564	山口	松田宇一	732	鹿児島	石井浄水
106	熊本	東秀雄	265	沖縄	・比嘉カメ	422	沖縄	大城蒲戸	567	愛媛	・池田ミヤノ	735	鹿児島	松山青一
107	熊本	井出喜平	266	沖縄	比嘉蒲	423	沖縄	新垣龜	568	愛媛	宮内長藏	736	鹿児島	安達隆太郎
109	熊本	榎本源藏	267	沖縄	比嘉蒲盛	425	沖縄	大城盛吉	570	愛媛	・岡田タキ	737	鹿児島	・安達カメマツ
110	熊本	松本惣作	269	沖縄	比嘉蒲戸	426	沖縄	金城盛吉	571	愛媛	・岡田アサ	739	鹿児島	瀬戸上金四郎
111	熊本	中村半次	270	沖縄	新垣蒲戸	427	沖縄	金城盛四	572	愛媛	岡田貞文	741	鹿児島	蛟島庄吉
113	熊本	松岡甚太郎	271	沖縄	・新垣カメジャ	428	沖縄	大城蒲戸	575	愛媛	東野綱吉	742	鹿児島	川原喜五郎
116	熊本	・上田ジュキ	272	沖縄	新垣龜	429	沖縄	・大城ウト	576	愛媛	東野青市	744	鹿児島	濱田政介
122	熊本	・中野テル	273	沖縄	新垣松	430	沖縄	大城龜代	577	愛媛	近藤林次	745	鹿児島	丸野政義
123	熊本	中野彦太郎	274	沖縄	新垣蒲	432	沖縄	新垣平太	580	愛媛	宮田儀三郎	746	鹿児島	前原仁次郎
124	熊本	永田呈三	275	沖縄	比嘉牛	434	沖縄	宮城仲盛	581	愛媛	・宮田ハナヨ	747	鹿児島	野村盛二
126	熊本	山中助次郎	276	沖縄	新垣松	435	沖縄	照屋堅喜	582	愛媛	宮田稔	748	鹿児島	永田一
128	熊本	豊島清太	277	沖縄	・新垣カメジャ	436	沖縄	・照屋カマ	583	愛媛	芳我徳太郎	753	鹿児島	上村喜一郎
129	熊本	豊島芳太郎	280	沖縄	新垣蒲戸	437	沖縄	宮城誠孝	586	愛媛	石川好三郎	761	高知	古味久吉
130	熊本	岩岡和作	281	沖縄	新垣蒲	438	沖縄	宮城樽	587	鹿児島	川畑徳之助	763	高知	中村芳治
131	熊本	・岩岡ツル	282	沖縄	比嘉松助	441	沖縄	大城徳太郎	589	鹿児島	川畑佐四郎	764	高知	井上馬太郎
132	熊本	前田三平	283	沖縄	・比嘉マツ	442	沖縄	大城立藏	590	鹿児島	小牧齊造	765	高知	・井上龜壽
133	熊本	岩尾朝平	284	沖縄	比嘉加那志	444	沖縄	照屋堅仁	591	鹿児島	・小牧カル	767	高知	岡村繁吉
134	熊本	光永清吉	285	沖縄	喜屋武蒲	451	沖縄	金城孝八	594	鹿児島	松山新之助	770	高知	谷岡庄太郎
135	熊本	・光永ユキ	286	沖縄	喜屋武龜三	452	沖縄	・金城カマ	595	鹿児島	・松山シメ	774	新潟	・菅原マチ
136	熊本	光永三利	288	沖縄	新垣龜	453	沖縄	金城基吉	600	鹿児島	田中定之助	777	新潟	・神田タカ
137	熊本	中田佐市	289	沖縄	・新垣カマ	459	沖縄	有銘兼徳	601	鹿児島	・田中キク	778	新潟	神田拙郎
138	熊本	・中田ユキ	290	沖縄	城間宇志	460	沖縄	有銘兼順	604	鹿児島	・清水トメ	779	新潟	西村市平
140	熊本	・上田ミチ	291	沖縄	新垣善良	461	沖縄	石川百藏	605	鹿児島	清水佐吉	780	新潟	・西村マル
141	熊本	上田主	292	沖縄	宮城次郎	462	沖縄	石川達吾	606	鹿児島	上井忠	781	新潟	横井新作
142	熊本	中島勘五郎	293	沖縄	山内樽	463	沖縄	石川賀名	607	鹿児島	・上井ヒロ			
143	熊本	・中島モセ	294	沖縄	新里樽	464	沖縄	盛吉智珍	608	鹿児島	西仁志			
144	熊本	中島爲次	295	沖縄	・新里カマ	465	沖縄	・盛吉カメ	609	鹿児島	森敏哉			
145	熊本	橋口重正	296	沖縄	比嘉光永									

7. 対照表の見方

8種の名簿を筆者が入手した順番に縦行に配し、同一人物と見られる人物の姓名を横列に配した。

その際、煩雑になるが「同上」「同左」といった表記法を避けた。これは、表の「行」や「列」を入れ替えた場合に混乱が起こるのを防ぐためである。

原資料の旧漢字体、略字体、カナ表記は、なるべく原文に従った。しかし、手書き文字や、メディアのフォントの制約で、どうしても表示できなかったものがある。8種類の表を通じて旧漢字体は、別表に当用漢字体、略字体を表示した。結婚や養子縁組で改姓・改名が明らかな場合「○」、該当する人物が見当たらず、全く推定で当てはめた場合は「？」を付した。また③の資料には姓のローマ字頭文字があったので、読み方が参考になった人には、その頭文字を付した。例えば38番の人は「S」とあり、菅野（カンノ）と菅野（スガノ）の両方の表記が混在する場合、「菅野」が本来の表記である確率が高い。

8種類の名簿で、ある人物に複数の姓名表記がある場合は、筆者が、確率が高い表記と判断した表記に☆印を付けた。判断基準は①頻度、②公式文書、③命名の慣例の3点だが、確信はない。☆印と異なる表記は、初出に「★」を付け、さらにそれとも異なる表記に◆を付けた。〈〜左衛門〉を〈〜左エ門〉や〈〜左エ門〉、〈三郎〉を〈三良〉、「大城實太郎」のように實を実と略字体で記録したもの、エとエのような仮名表記の違い、片仮名を平仮名で表記したものは、必ずしも誤字とは言えない。人名は、本人が日常使用する表記や発音に複数ある事もある。

引用文献（移民名簿）

（注1）内山勝男編『かさと丸：日本移民五十周年記念』日本移民五十年祭委員会発行、（サンパウロ・1958年）pp.65-79。

（注2）同上書、pp.50-64。

（注3）香山六郎『移民四十年史』香山六郎発行（サンパウロ・1949年）pp.38-50。

（注4）『笠戸丸：竹村第1回移民原簿・明治41年6月18日サントス着』マイクロフィルム（原本はサンパウロの移民史料館）所蔵例：横浜市立図書館、琉球大学、国際協力事業団図書館。

（注5）外交文書『3門・通商、8類・帝国臣民移動、2項・移民、243号、皇国殖民合資会社伯刺西爾国移民取扱一件』外務省外交史料館所蔵。

（注6）外交文書『3門・通商、8類・帝国臣民移動、2項・移民、38（巻30）号、移民取扱人を經由せる海外渡航者名簿』外務省外交史料館所蔵。

（注7）香山六郎編『在伯日本人移殖民25年記念鑑』聖州新報、1934年、pp.41-24。

（注8）日本語編集委員会編『ブラジル沖縄県人移民史：笠戸丸から90年』ブラジル沖縄県人会、2000年、pp.66-82 および pp.454-461。

【付録・2】拙稿「笠戸丸：マルチメディア用ソフトウェア試作資料」はこれまで以下の号に掲載されてきた。

（1）「笠戸丸：マルチメディア用ソフトウェア試作資料」『研究紀要』第5号、駒沢女子大学、1988年12月、pp.1-14。

（2）「笠戸丸：マルチメディア用ソフトウェア試作資料（2）～移民船時代～」『研究紀要』第6号、駒沢女子大学、1999年12月、pp.1-15。

（3）「笠戸丸：マルチメディア用ソフトウェア試作資料（3）～台湾航路時代から～」『研究紀要』第33号、駒沢女子短期大学、2000年3月、pp.51-68。

（4）「笠戸丸：マルチメディア用ソフトウェア試作資料（4）～病院船・漁工船時代～」『研究紀要』第7号、駒沢女子大学、2000年12月、なお同資料（4）の29ページ参考文献の著者名で浅利政利とありましたのは浅利政俊の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

【付録・3】

参考文献：(戦時輸送船関係) A B C 順

- ①土井全二郎『栄光何するものぞ』1995年、朝日ソノラマ
- ②藤崎康夫『航跡：ロシア船笠戸丸』昭和58年、時事通信社。
- ③畑中一男・細窪敬編著『補給戦かく闘えり』昭和58年、ISC。(巻末に兵站についての考察あり)
- ④平松清一『奇跡の高射砲隊』昭和56年、叢文社、p. 275。
- ⑤海防艦顕彰会編・発行『海防艦戦記』昭和57年(本稿の海防艦の動静は多く本書によるが、矛盾もあるので個々の艦の記録と取材で補完した)。
- ⑥海員史話会著『海上の人生』1990年、農山漁村文化協会
- ⑦海事産業研究所『近代日本海事年表』1991年、東洋経済新報社。
- ⑧木俣滋郎『日本海防艦戦史』1994年、図書出版社。
- ⑨駒宮真七郎『船舶砲兵』1977年、出版協同社。
- ⑩森田友幸『25歳の艦長海戦記』2000年、光人社。
- ⑪日本水産編『日本水産の70年』昭和56年。
- ⑫日本郵船株式会社編・発行『日本郵船戦時船史』(下巻)昭和46年、pp. 840—907。
- ⑬岡本信男編『日魯漁業経営史』第1巻、昭和46年、水産社、pp. 426—427。
- ⑭奥宮正武『大太平洋戦史の読み方』1993年、東洋経済新報社。
- ⑮大井篤『海上護衛戦』昭和58年、朝日ソノラマ。
- ⑯Roscoe, T., *US Submarine Operation in WWII*. U. S. Naval Institute, 1949.
- ⑰高橋辰雄『護衛船団戦史』1989年、図書出版社。
- ⑱土屋博靖「ブラジル移民第一船『笠戸丸』の生涯」『明治村評判帖5』昭和51年、博物館明治村、pp. 159—199。
- ⑲宇野公一『雷跡!! 右30度』昭和52年、成山堂。
- ⑳全日本海員組合企画監修『海なお深く』1986年、全日本海員福祉センター。
- ㉑富永謙吾編『現代史資料39 太平洋戦争5』1984年、みすず書房。